

特集

未来を創る

—新しい住まいのかたち

福田平八郎
小林古徑
村上華岳 土田麦僊
菱田春草 今村紫紅
横山大観
富岡鉄斎

ワシントン国立美術館
「カレリア」美術館
アメリカ美術館
クレムリン美術館
八日国立近代美術館
ワシントン国立美術館

DECAS
RODIN BOURDELLE
RENOIR
CEZANNE
MONET
MANET



生活様式や社会的価値観が大きく変わろうとするなか、
 私たちはどのように社会とかわかっていくべきか。
 より良い未来を創造するために、
 本質的な課題を明らかにすべく、
 情報誌『CEL』では「未来を創る」と題した
 シリーズを展開しています。
 第3回のテーマは「新しい住まいのかたち」。
 従来の枠組みや既存概念を取り払い、
 次世代の暮らしを見据えた住まいのあり方に挑戦する
 先駆的な取り組みに迫りました。



表紙／「中京・風の舎」(京都市)。
 室内側から玄関を見る
 撮影／畑拓
 裏表紙／「もりねき住宅」の中庭
 撮影／Ayami
 大扉／京都下鴨修学館
 撮影／宮村政徳

CONTENTS

特集

未来を創る
 —新しい住まいのかたち

[対談]

02 **ウチとソトの関係性**
 —多様化する暮らしに寄り添う住まいとは

岸和郎 [建築家]
 加茂みどり [大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所 研究員]

[インタビュー]

08 **家族の新しいかたち**
 —「拡張家族」という社会実験に添う住まい

橋本浩和 [株式会社フラットエージェンシー プロパティマネジメント 部部長]
 山倉あゆみ [一般社団法人Cift・京都下鴨修学館 コミュニティマネージャー]

[インタビュー]

14 **住まいを開いて、まちを元気に**
 —公民連携による市営住宅の新しい形

入江智子 [大東公民連携まちづくり事業株式会社(コーミン) 代表取締役]

20 **住まいのサブスクリプション**
 —都市と地方で人口をシェアする

佐別当隆志 [株式会社アドレス 代表取締役社長]

26 **楽しむ空間としての住まい**

池本洋一 [『SUUMO』編集長/SUUMOリサーチセンター センター長]

32 **「IoT住宅」の現在とこれから**

野城智也 [東京大学生産技術研究所 教授]

[対談]

38 **新しい住まいのかたちとは何か**
 —持続可能性と中間領域から考える

高田光雄 [京都美術工芸大学 教授]
 加茂みどり [大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所 研究員]

[書籍案内]

44 **未来を見据え、新しい住まいのかたちを考えるための10冊**

[連載]

46 **未来ブラリ**
 第3回 コロナ禍、住まいは空母化する？
 山本貴代 [女の欲望ラボ代表] = 文

[連載]

48 **大阪の胃袋**
 第3回 関西で「関東」を食べる
 —かんとだき物語
 湯澤規子 [法政大学人間環境学部 教授] = 文

[レポート]

50 **家族型ロボット「LOVOT」との暮らし**
 熊走珠美 [大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所
 情報誌『CEL』編集長] = 文

[連載]

52 **私たちが考える万博**
 第7回 「コロナ時代」の万博とは
 池永寛明 [大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所 顧問]

[エッセイ]

54 **街の魅力**
 わかぎふ [作家・演出家] = 文

[CELからのメッセージ]

56 **ニューノーマル時代の「住まい」のかたち**
 金澤成子 [大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所 所長]

万博遺産 第4回

橋爪節也 [大阪大学総合学術博物館 教授]

ウチとソトの関係性

——多様化する暮らしに寄り添う住まいとは

対談

【建築家】Kishi Waro

岸和郎

加茂みどり

【大阪ガス株式会社エネルギー・文化研究所研究員】
Kamo Midori



ライフスタイルは日々変わりゆく。さらにコロナ禍の影響もあり、「住まい」は、仕事や遊びも含めた生活を行う場として、重要性が増している。多様なニーズに応えるためには、新たな視点から

「住まい」を読み解く必要があるのではないだろうか？

建築家の岸和郎氏は、京都を拠点に古都の街並みにマッチしたモダニズム建築を数多く手がける。

建物のインターフェースの設計を通じたウチとソトの多様な関係性などについて、

「大阪ガス実験集合住宅 NEXT21」を担当する加茂みどり研究員が幅広く伺った。

電気工学と建築史、幅広い見地での設計

加茂 「住宅のウチとソトをどうつなぐのか？」「家を開くとはどういうことか？」というテーマを考えています。岸先生は、建築家として、住宅のみならず商業ビルや大学、寺院など幅広く手がけられています。独特の世界観をもつ

作品において、建物の内外をつなぐインターフェースの設計には、とりわけ工夫を凝らされているように思えます。また東京ではなく、京都を拠点にされていることもあり、住宅は自然や都市といった外部の「環境」だけではなく、歴史や文化とも接点をもつことを強く意識させられます。

今日は広い観点から、住宅を含

む建築がこれからの時代にどう外部との関係を構築していくべきなのか、お話を伺いたいと思います。岸先生は大学で建築史を学んだ経歴をもついらっしゃいます。建築史の研究室では、何をテーマにされていたのですか？

岸 生まれは神奈川県横浜市ですが、京都大学に進学しました。大学も最初は電気工学科に進みましたが、これでいいのかなと将来に疑問を感じているときに、ル・コルビュジェと出会います。そこからミース・ファン・デル・ローエを含むモダニズムの建築に魅せられていきました。

当時はポストモダニズムという言葉が使われはじめ、近代的な合理主義がもつ限界が強く意識されるようになった時代です。ロバー

ト・ヴェンチニョーリ『建築の複合と対立』といった本を読むと、ミケランジェロが20世紀の建築といわば同列に扱われているのに驚きました。私だけではなく、その頃多くの人が歴史のなかに新たな答えを見出そうとしていたのです。

研究室でよく雑談をしていたのですが、面白かったのは、ルネサンスの建築家に現代日本の建築家を当てはめてみるという遊びです。「パツァーディオは磯崎新さんだよね」とか、「アルベルティなら槇文彦さん」といった具合。そのように考えていると、中東の古代遺跡もルネサンス建築も日本の伝統建築も、いわば等価なものとして、その本質が見えてくるような気がしました。京都で建築を志し、同時に建築史を学んだことが、その後の仕事に大きな影響を与えることになったと思います。

加茂 修士論文は、土浦亀城という昭和初期のモダニズム建築家について書かれていますね。彼が設計した自邸は、現在につながる日本の都市住宅の原点ともいわれます。モダニズム建築の魅力は何であるとお考えですか？

岸 もともと電気工学科で学んでいたこともあり、原因と結果を追い詰めるような論理的な思考が好きでした。建築というのは、周辺の大きな世界のなかにもうひとつの小さな世界をつくること。ある環境のなかに設計された建物を挿入してあげると、周囲もその影響を受ける。論理的思考の彼方で、世界は変わり始める。そんな風に信じていますね。

加茂 「屋上庭園」や「中庭」の使い方をとつても、岸先生の設計には強い論理性を感じます。閉じた中庭から上へ行くにしたがって徐々に開き、都市の「借景」に至る「武蔵野段丘の家」や、周辺の環境とゆるやかに区切りながら内側にオープンな「中庭」と「空」をもつ「深谷の家」など、周囲の環境に合わせる方法論のバリエーションもとても豊かですね。

岸 絵描きや彫刻家なら、好き嫌いといった主観的な造形形ものをつくるのでしょう。でも建築家はそうあるべきじゃないと思う。「屋上庭園」や「中庭」も、こういう雰囲気がいいよねといった感覚ではなく、周囲の環境に対しど



んなインターフェースをつくるのがいいのか、その場所を読み、論理的な視点から捉えます。したがって建物を設計するときには、その場所へ実際に足を運び、現場で自分が感じるものを大切にします。書物などからスタイルや技術を学ぶのは好きではありません。

「日本的なもの」と格闘するようになった

加茂 私自身も若い頃、ミース・ファン・デル・ローエが好きで写真集を買ったりしていました。岸先生の初期作品にも、それに近い魅力を感じます。

ところが岸先生は、ある時海外で、「日本的な建築家」という評

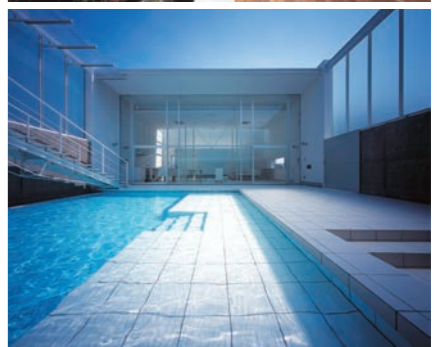
価をされ、その後木材を使うなど、少しずつ積極的に「日本的なもの」を取り入れた作品を発表されていますね。そうしたスタイル変遷の背景には、どんな経緯や心境の変化があったのでしょうか？

岸 当時は、自分の建築が「日本的」だと思ったことがないので、そういう評価には僕も驚きました。スペインやイタリアなど海外のメディアから、「京都という伝統的な都市で戦っていることに共感する」などと、妙に共感されてしまったり。戦っているつもりはないのに(笑)、どういうことだろう？と思っていました。現代建築のミニマリズムと日本文化を安直に結びつけるような考え方には、警戒感をもっていましたからね。

そんななか、90年代のはじめに「紫野和久傳」という日本料理店を設計しました。これが、いわば初めて本格的に日本的な空間というものと格闘した仕事です。

加茂 小さな敷地の1階は閉じた空間という印象が強いですが、2階にあがると大徳寺の緑に向かつて開いていく感じが素敵です。

岸 なにしる狭い敷地なので、庇



上/「武蔵野段丘の家」(2005年・東京都) 撮影/上田宏
下/「深谷の家」(2001年・埼玉県深谷市) 撮影/平井広行

をつくる余裕がない。そのとき声をかけてくれた中村外二工務店の中村義明親方が言ったのは、「あんた、庇のない和風ができるやろ」。だから問題は、鉄筋コンクリートの建物で和風をどう表現するのか、でした。対面する大徳寺の建築にいかにか敬意を払うか、と言ひ換えてもよいでしょう。建物の構造はモダニズム建築そのもので、まさにヨーロッパ的。そこに木材や紙、土といった日本的な素材を使って和の空間をつくる手法を、七転八倒しながら考えました。

加茂 やはり、現場で考えられたのですね。

岸 自分自身のことには、「ブルーカラーの建築家」と考えています。

そのときは、せっかく中村外二工務店と一緒にやるのだから、日本的な素材について学ぼうと思いましたが、中村さんにも尋ねたんです。「海外の編集者から、お前の建築は日本的だと言われるんですが、なぜでしょうか？」

その答えは意外でしたが、すつと腑に落ちるものでした。「あなたの建築は、重心が低いからな」というのです。

加茂 なるほど、そういうことでしたか！ たえば床座を意識されたことはあったのでしょうか？

岸 現代においては、もはや床座というのはありえないと思います。お年寄りには腰に負担がかかるし、若い人ならなおさらです。立って

いても、重心の低い空間はある。

ともかく、この仕事をきっかけに、その後も「和」というテーマも引き受けていこうと覚悟しました。京都で建築という仕事をするなかで、「日本的なもの」と正面から向き合おうと決心できました。

とはいえ、美観風致的な考え方はだけはたくありません。屋根の勾配は何寸、平入りで素材と色はこれかこれ、などという方法で「日本的なもの」を表現しても、新しいものは何も生まれないと思うからです。

専用住宅の窮屈さを打開するために

加茂 日本建築には縁側をはじめ、ウチでもソトでもない中間領域の

つくり方という意味でも、学ぶべきところは多いのではないのでしょうか。岸先生は、これからの住宅のインターフェースのつくり方について、どのようにお考えですか？

岸 今は住宅というと普通、家族がプライベートな時間を過ごすための専用住宅をイメージします。けれども、それは長い歴史のなかで見ると、むしろ特殊な例外的な状況ではないでしょうか？

ルネサンス期のヴィラなどもそうですが、邸宅や家と呼ばれるもののほとんどが、かつては仕事場でもある併用住宅でした。今の日本では少なくなりましたが、ベトナムやタイの商店街に行けば、上が住宅で下がお店という店舗併用住宅がよく見られる。住宅Ⅱ専用住宅という思い込みによって、人々はかつて併用住宅がもっていた豊かさを失っているのではないだろうかと思っています。

加茂 それは、興味深い視点です。岸 フランス語でブドワールと呼ばれる空間は、普通「閨房」と訳され、婦人用の私室と思われています。でも実際、そのニュアンス

は少し違います。ここは完全なプライベート空間ではなく、応接間と私室のあいだのような役割をもっていました。

加茂 中間的な領域ですね。

岸 ブドワールというと、僕などはマリー・アントワネットが配下のスパイから報告を受けているような場面を想像してしまいます。侍女などもいるけれど、そこで聞いた話を口外したら、とんでもないことになる。日本でも、たとえば大奥や後宮といったものを考えれば、同じようなことが言えるでしょう。

加茂 私どもの実験集合住宅「NEXT 21」(※)でも、中間領域の提案を行っています。たとえば縁側のように、公的な空間と私的な空間、または屋外空間と屋内空間の中間領域という意味ですが、そこに現代的な意味を見出そうとしています。プライベートな空間だけれど外部の人も入れる、そして子育てにおけるシッターや介護サービスといった外部のサービスを利用しながら、プライベートもしっかりと守ることができる、そんな新しい中間領域をつくらうと

しています。

岸 まさに、マリー・アントワネットのブドワールですね。

加茂 本当に、そうですね。私自身は京都の町家で育ったので、マッシュンと呼ばれるような集合住宅の閉ざされた空間の暮らしに驚きました。モダンな集合住宅であっても風が通り抜ける、そしてソトとのあいだにゆるやかな中間領域をもつ住まいを考えなかった。それはまたプライベートと仕事場、両方の役割をもつ併用住宅にも近いものだと思います。

岸 僕も、住居でもありオフィスでもあるという多機能空間として「書院/Third-place」と名付けたプロジェクトをやりました。

これは集合住宅の改装ですが、住人がお客さまなどを招いて、立礼式という椅子に座って行う茶道を勉強する場所、という特殊な目的もあった。数寄屋造りの茶室は、所作が細かく決まっているイメージがあります。しかしここは住まいとしての機能もありながら、外部の人と会うこともできる書院造りへの先祖返りということで、こんな名前をつけた。



Third-placeというのは、都市内に居住している、すなわちhouseが都市の住居という人が、自然のなかに2番目に持つのがsecond house、そして都会に戻って自由に利用できる3つ目の場所といったニュアンスが込められています。

究極的には住宅も倉庫も同じ!

加茂 岸先生は、「住宅であつても内部の機能はいずれ変わっていくのだから、建築家がなすべきは外部のインターフェースを調整することだけ」と仰っています。その意味で、「住宅と倉庫は同じ」とまで明言された。

岸 それを言ったのは、住宅建築を特別視し神格化するような風潮が気に入らなかつたという理由も大きい。だから、別に「住宅はオフィスと同じ」でもよかつたのです。倉庫というショックを受け、人が多くいけれど、心のなかで倉庫を馬鹿にしているからだと思う。でも今はむしろ、社会のなかで重要な建築といえば、ロジスティックスを担う巨大な倉庫や、ネット

上に集積されたデータを守るサーバーセンターじゃないかとすら思っているのです。

加茂 しかし、住宅計画を専門とし、住まいのインターフェースのウチ側も考えている者にしてみると、そう言われてしまうと立つ瀬がありません(笑)。実は、「中京・風の舎」(41頁参照)という集合住宅の住戸リフォームを三澤文子さんと共同で設計したことがあります。私は計画を担当しました。集合住宅に京都の町家を再現したいと思ひ、風通しや中間領域の確保をめざしました。

岸 立つ瀬はありますよ(笑)。僕たち建築家も、具体的なニーズを考慮しながら建物を設計していることは事実です。

とはいえ、そういうプランニングの側面がいくら大切だと言っても、せいぜい100年くらいのスパンで考えるものでしょう。100年をすぎると、それが住宅として使われているかどうかすら怪しくなる。オフィスになるかもしれないし、それこそ倉庫に転用される可能性も出てくる。

加茂 そうですね。長期優良住宅

以前の公共空間では、快適に過ごせる広場の設計とか、素敵に時間を過ごせるカフェのデザインとか、むしろ逆に、人と人の内面的・精神的な距離を詰めることが大切だったので、距離をとる空間が求められるようになった。

加茂 一方でシェアハウスやコミュニティスペースといった新しいつながり方のニーズも増えていると感じます。

岸 基本的には、経済がそういうファシリティを決めていくのだと思います。「経済が決める」というと、悪いことのように思う人もいられるけれど、そうではない。経済条件が変われば、答えは変わる。

その意味で住宅の未来を考えると、最近気になっているのがホテルなんです。

加茂 それは、どういうことでしょうか?

岸 都市のホテルは窓が閉じていて、完全にエアコンで空調されていることが多いですね。昔はそういう空間が嫌いで、たまには窓を開けて外の騒音を聞きたいと思っていました。でも、完全に閉じたカプセルのような仮設的な住宅というのもありかも、と思えるようになった。

そこに30年住むイメージは湧きませんが、たとえば人生の3分の1くらい、仕事の都合によって短

を意識している部分があるので、確かに100年はひとつの目安となっているかもしれません。

岸 僕の大好きなフィリップ・ブルネレスキの孤児養育院(フィレンツェ)などは、500年のあいだにさまざまな用途に転用され、今は美術館ですからね。

加茂 なるほど。建築家のお仕事のなかで、時代とともに住宅の外部への開き方や、インターフェース自体を変えてしまうという可能性はあるのでしょうか?

岸 1987年に設計した「KIM HOUSE」のクライアントから依頼された2011年の改装は、まさにそういうものでした。この小さな家で道路側のファサードを閉じるというのは、1987年当時の都市住宅の解としては妥当と思えました。しかし24年後に現地を訪れてみると、周囲の環境は昔とほとんど変わらず、しかも家族はご近所と親しくつきあっている。それなら、思い切ってファサードを開いてみようと思ったのです。

加茂 新旧の写真をくらべるとまったく印象が違いますね。空間のつくり方も変わっていますね。

期間であれば、そういうオプショングがあってもいい。もちろん、実際に設計する機会があれば、まったく別物になると思います。加茂 個人を包みこむ、あるいは個人が纏う最小限の空間、といったイメージでしょうか。

岸 海外の高級ホテルなどでは、ホテルに隣接したサービスアパートメントが販売されることがあります。そこでホテルのファシリティであるルームサービスやランドリー、スパなどを利用すれば、私たちが住宅に必須だと思っているキッチンもいらなくなるし、浴室もシャワーがあれば十分で、スパに行くと、広い湯船や露天風呂が待っている。

加茂 住まいのウチとソトを分ける、境界線の組み替えですね。お話を伺っていると、住宅のイメージがどんどん軽やかになってくるような不思議な感覚があります。

岸 50年間暮らした家をどうしても離れたくない、という知り合いのお母さんの話を聞きました。そういう住まいへの思い入れを、今さらながら聞くことは多い。とはいえ、住宅の将来を根本から問い

岸 基本的な構造は残っています。が、まったく別のものになっていますよ。機能的に閉じる必要があった建物をオープンにすることは可能です。古いストラクチャーを生かしながら、いかに都市に開くかを考え直せばよいと思う。

住宅をもっと離れたところから見つめる

加茂 時代とともに変わっていく建築のあり方を、強く意識させられる例です。先ほどサーバーセンタの話も出しましたが、最近のコロナ禍によっても、求められる住宅のインターフェースのあり方は変わってくるかもしれませんね。

岸 コンピュータも外部とのインターフェースのひとつです。Windows(窓)というネーミングは、偶然じゃありません。窓の彼方の世界とどうつながるか。社会の価値観がドラスティックに変わっていくとき、建築はITのように素早く対応することはできませんが、少し遅れて、しかし大きく変わっていきます。

コロナ禍で求められているのは、人と人の距離をとること。しかし

直すのであれば、少し距離をとり、住まいへのこだわりを捨ててみるのもひとつの方法です。そうすると、もっと楽しい可能性が見えてくるのではないかと。

加茂 想像していなかったような住まいの可能性が垣間見える、素敵なお話をたくさん聞かせていただき、ありがとうございます。

* 注

大阪市天王寺区にある大阪ガスの実験集合住宅。地上6階、地下1階で、3階以上に18戸の住戸がある。1993年の竣工以来、定期的な改修を行いつつ、実際の居住を通じたさまざまな提案・実験・検証を行つた。https://www.osakagas.co.jp/company/efforts/nex21/

岸和郎(きし・わろ) 1960年、神奈川県生まれ。73年京都大学工学部電気工学科卒業。75年同大学工学部建築学科卒業。78年同大学院修士課程建築学専攻修了。81年岸和郎建築設計事務所を設立。93年KASSOCIATES/ Architectsに改組改称。京都工芸繊維大学、京都大学などで教鞭をとる。UCバークレー校、MITで客員教授を歴任。現在、京都芸術大学大学院教授、京都大学名誉教授、京都工芸繊維大学名誉教授、日本橋の家(92年)で日本建築家協会新人賞、ケネス・F・ブラウン・アジア太平洋デザイン賞功労賞、日本建築学会賞を受賞。主な著書に『迷巡する思考』(共立出版)、『デッドエンド・モダニズム』(UCL出版)などがある。

加茂みどり(かも・みどり) 大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所研究員。大阪ガス入社後、リビング事業を経て、2007年より現職。京都大学博士(工学)。岡山県立大学・大阪商業大学非常勤講師。神戸市すまい審議会委員、堺市住宅まちづくり審議会委員、国立研究開発法人建築研究所研究評価委員会住宅・都市分科会委員など。集合住宅の住戸リフォーム設計「中京・風の舎」で第35回住まいのリフォームコンクール国土交通大臣賞受賞。



上/「KIM HOUSE」(1987年・大阪市生野区) 撮影/平井広行
下/同上・2011年に改装 撮影/小川重雄

家族の新しいかたち

「拡張家族」という社会実験に添う住まい

インタビュー

橋本浩和

株式会社フラットエージェンシー
プロパティマネジメント部長

山倉あゆみ

一般社団法人Cifft・京都下鴨修学館
コミュニティマネージャー

加藤しのぶ | 取材・執筆
宮村政徳 | 撮影



住まいを取り巻く環境が大きく変わろうとしている現代。ハード面としての「住まいのかたち」のみならず、血縁でつながった者が家族として共に生活するという従来当たり前とされてきた「暮らしのかたち」にも変化がおきつつある。

一般社団法人Cifftは、「拡張家族」というコンセプトのもと、多様な人々が共同で暮らしながらひとつの「社会実験」をしているという。Cifftにとって関西初の拠点となる「京都下鴨修学館」の事例を通して、その取り組みを紹介する。

京都市左京区下鴨の住宅街の一角、疎水べりの角地にコンセプト型シェアハウス「京都下鴨修学館」はある。道路に沿ってV字型にのびた建物とその中央にあるエントランスの佇まいも含めて、どこか懐かしい雰囲気が漂う建物だ。

「1970年、親元を離れて学校に通う女子学生が安心して住めるようにという先代オーナーの思いから建てられた女子学生寮でした。2020年に全面改修しましたが、外観は当時の佇まいを残すようにしました」と話すのは、改修に携わった㈱フラットエージェンシー・プロパティマネジメント部部長の橋本浩和氏。同社は京都を拠点とした不動産仲介・管理業者としてさまざまな大学などと提携し、多くの学生に住まいを紹介してきた。この修学館のオーナーとも長年にわたるおつきあいだという。

中に入ると、屋内なのに風が心地よく通りすぎるのを感じた。目の前には広々とした廊下と光が射しこむ明るい空間が広がっている。50年の歴史を刻む建物の重厚感が漂いつつも開放感あふれる玄関では、Cifftのメンバーである山倉あゆみ氏が笑顔で待ってくれていた。山倉氏は食農プランナーとしてコンサルティング事業を本業としながら、Cifftのコミュニティマネージャーとして「京都下鴨修学館」の立ち上げの中心となった人物である。

建物を一見する限りは、家を共同で使用する一般的なシェアハウスの造りとなんら変わりがない。しかし「京都下鴨修学館」はコンセプト

型とある通り、少し性格が異なっている。ここはCifftの掲げる「拡張家族」というコンセプトを共有したメンバーと、そのコンセプトに賛同する一般の居住者が、共に暮らしながら、新しい家族のあり方を模索する「社会実験の場」でもあるのだ。

「拡張家族」とは？「社会実験」とは？ 橋本氏、山倉氏のおふたりにCifftのこと、修学館を拠点とした経緯や建物の改修について、さらには実際に入居者を迎えてからのことなど、お話を伺った。

対話を重ねる暮らし——「拡張家族」

Cifftは価値観を共有するメンバーが共同生活を通して、家族とは何かを改めて問い直し、「共に暮らし、共に働く」ことを実践・発信する一般社団法人である。立ち上げは2017年、東京・渋谷の複合施設のワンフロアを拠点とし、価値観を共有する住民40人弱と「実験」と称する共同生活をスタート。

コンセプトの「拡張家族」を、山倉氏は「相手を家族だと思ってみる」ことを意識しながら共同生活をする実験」だと説明する。

「たとえば初めて会った人でも、自分の家族だと思ってみると、だんだん相手のことが『自分ごと』になっていく感覚が芽生えてくる。そういう意識の変化を重視しながら生活しています。つまり、拡張するのは家族というより自分

自身の意識、家族観なのだ」と最近気付きました」

さまざまな「気付き」があることが面白いんです、と山倉氏。重要なのは「意識的に関わること」なのだろう。お話のなかで何度も「対話」という言葉が使われた。家族として意識しながら暮らすなかで必要になるのは、相手に自分の気持ちを伝えたり、相談ができる関係性の構築だが、「これが意外と難しい。だからこそさまざまな対話を重ねながら人間関係や固定観念を考え直す作業をしているのです」。

メンバーは共同生活にあたり通常の家賃に加え、組合費を払っている。幅広い年齢、多種多様な仕事をする人々が共に暮らしながら、さまざまな気付きを共有する。たとえば、自分に子どもがいなくても子どもを持つメンバーの子育てを共有することで、その苦労を知ることができるのも「家族だと思ってみる」ことから得られる体験だ。メンバーには多拠点居住者も多く、山倉氏も新潟や京都を含めた4拠点を行き来しているという。

スタートから5年。メンバー数も昨年100人を超えた。そして、公式拠点の4つ目が、関西初となる「京都下鴨修学館」である。

「京都下鴨修学館」が始動するまで

Cifft内で関西に拠点をという話があるなかで、物件探しのために相談したのがフラットエージェンシーだった。橋本氏はCifft側



閑静な住宅街の一角、疎水のせせらぎと共に鳥のさえずりや虫の鳴き声が絶えず聞こえてくる自然豊かなエリアに建つ「京都下鴨修学館」。春には見事な花を咲かせる桜並木を館内から見物し放題というのも大きな魅力だ。



共用スペースのリビングは、Ciftメンバーも一般居住者も自由に利用できる。食事や会議だけでなく映画鑑賞や健康体操教室などさまざまな交流の機会もある。



2階中央部に新たにつくられた共用のワークスペース。ちなみに壁やリビングのカーペットの色味などは山倉氏などCiftのメンバーの意見も反映されている。椅子や家具なども山倉氏をはじめメンバーが持ち寄ったものだ。



Ciftメンバーの多拠点居住者向けに用意されているシェアルーム。9畳の広さにベッドや寝具、ソファなどがコンパクトに配されている。一般居住者や定住者向けは4畳半タイプの部屋となるが、いずれも大きな窓があるため明るく、圧迫感はない。

から「拡張家族」の説明を聞いても、当初はその意味がよく分からなかったという。しかし、実際に渋谷のCiftを見学して衝撃を受けたそうだ。

「ひとつの部屋を複数の人が順番に使用したり、共用部分を全員が家族のように使用しているのが印象的でした。ちょうど従来のシェアハウスの運営では人との関わり方がスムーズにいかず、難しさを感じていたところでした。我々も新しいことにチャレンジし、自分たちの中に取り込んでみたいと思いました」

そのなかで候補となったのは、学生寮としての利用が難しくなり一時閉館したが、新たな活用方法を模索していた修学館である。

「オーナーの宮崎又行さんは、美術家であり、

住人のプロフィールは多様である方がいい。似たような経歴の人が重ならないようCiftメンバーからの希望者については、Ciftが担当し、2〜3時間をかけてオンライン面談を行った。一般居住者はフラットエージェンシーが担当、コンセプトを説明しそれを共有してくれる希望者をCiftに紹介、面談を経て居住者が決まった。

橋本氏は当初居室が埋まるのか不安だったというが、実際は早々に満室となった。現在も入居希望者は後を絶たず、ウェディングリストを作成している状況である。

相手のことが「自分ごと」になる

改修後の「京都下鴨修学館」のあらましを紹介



1階はこの廊下を挟み右側が談話室、左側が台所になっている。ほかに共用スペースはお風呂場とシャワールーム、洗濯室、洗面所などの設備が整っている。



柔軟な考え方をもちましたので、新しい取り組みもご理解いただけるのではという思いがありました。実際に渋谷のCiftを見学してもらおうと、『住人同士の関係性がうまく築かれていて、人が孤立しがちな現代に合っている』と賛同をいただきました」

2018年より修学館の改修計画が本格化。改修の設計を担当したのは建築家の土橋孝一氏。今のまま建物を生かし、四季の移ろいを肌で感じられる空間を大切にしたいというオーナーの希望や、Cift側の利用者としての意向も取り入れて設計が進められた。外観と居室の内部空間は昔ながらの風合いを生かしながらもとは34室あった部屋数を22室に縮小し、その分共用スペースを複数つくり、対話が生まれや

介しよう。まずは住人について。ひとりで暮らす定住者は10人、ほかの住人はひとつの部屋を複数名でシェアしているが、こちらはメンバーの子どもも含め3〜60歳の40人が登録している。Ciftメンバーと一般居住者の割合はいずれの入居形態も半々くらいとなっている。なお、シェアで使用する部屋の契約は、その部屋の代表者1名が借主となり契約書を交わし、シェアメンバーは同居人として名前を記す。賃料は一部屋2万5000円から4万円程度、シェアルームの場合の賃料の分担は部屋ごとの裁量、部屋の利用についても部屋別にあるカレンダーやメッセージ(SNS)を使ってメンバー同士で決める。もし自分が利用したい日にほかの人と希望が被る場合は、ほかのシェアルームの住人と交渉してもいい。そのために相談ができる関係性が築けていることが前提である。

居室の仕様は、4畳半一間と、二間を一続きとした9畳の2タイプ。どの部屋も窓が大きくとられ、光が射しこんでいる。風呂は一般家庭と同様のものがひとつ。シャワールームも別にあるとはいえず、定住者10人が使うのには足りないのではと問うと、「銭湯に行く人もいますし、お互いに相談しながらうまく回しているのです。ひとつあれば十分。洗濯機も同じです。むしろ一部屋にひとつ置く必要が本当にあるのかということですよ」と山倉氏の答えが返ってきた。なるほど、そうかもしれない。己の無意識の思い込みに気付かされる。

すい場を設けることとした。ところが実際の改修作業が始まってすぐにコロナ禍に見舞われ、工事は遅れることに。一般入居の始まった2020年9月の段階では、屋根や壁などの外装や庭が工事中だったという。しかし「家が出来上がっていく様子を見たり、左官屋さん、庭師さんといった京の職人さんと知り合えたり、貴重な体験ができました」と山倉氏。「社会実験」として物事を捉えるからだろうか、その目線は柔軟である。

改修工事に並行して居住者の募集も進められた。先述の通り住人はCiftメンバーとそのコンセプトを共有する一般居住者だが、Ciftにとっては一般居住者と共に住むのは初めての試みで、「新しい実験」でもあったという。

広々とした台所にはきれいに磨かれた調理器具が整然と並び、大きな冷蔵庫にはぎっしりと食材が入っていた。食材は住人の持ち寄りだが名前が書かれていなければ誰が使っても自由である。誰かがつくり残した料理をほかの人が食べるのも自由。もちろん、ひとり分だけつくってもいい。

共用スペースは3カ所。2階は2室、うち1室はワークルームとして使えるようになっていた。1階の共用スペースの片隅には小さな木箱があった。中にはお金が無造作に入っている。「どんぶりバンク」と呼ばれるこの箱には、たとえばつくってもらったご飯のお礼や、何かをしてもらったお礼の気持ちを金として入れる。入れられたお金は皆で何かを食べる時の資金ともなるが、使い方も住人にまかされている。

共用スペースの使い方などをお聞きすると、ほとんどが「自由」「ルールは特に決まっていない」という返事であることに驚く。「拡張家族」のコンセプトは共有しているが、それ以外の暮らし方は個人の裁量なのである。家族として暮らすのだから当然ということであろうか。しかしその感覚を自然に共有するためには、相手のことを考え尊重する姿勢が何よりも必要となるだろう。そうか、それが最初にお聞きした、相手のことが「自分ごと」になるということか、と腑に落ちた。

ここには一般居住者の学生がふたり暮らししている。生活体験が浅い彼らにとっては「自分ご

と」という感覚の獲得過程そのものが得難い経験になるだろうし、どんぶりバンクにお金を入れる時にその対価を推しはかる作業は、金銭感覚を磨くさやかな訓練にもなりそうだ。

学生寮だった時代にはシャワー小屋が置かれていた庭を整え、畑を始めた。堆肥をつくるために落ち葉が大量に必要となり、建物の外周りの掃除をしながら近所の家の分もわけてもらうそうだ。おかげで近隣住民との交流も生まれるようになった。

「対話のために必要なのは場づくりですが、ただ場をつくらただけでは対話は生まれません。今、ここでの生活はうまく循環していると感じますが、それは住人の意識の高さに加えて、ここが京都だということも大きいと思います。相互に助け合う暮らしが身近にあり、周りの人がごく自然に受け入れてくださっていることも影響していると思います」（山倉氏）

面倒くさいことを意識し合い、 後ろ姿を閉じない関係性

ルールは極力決めないとはいえ、問題が生じた場合にはどう対応しているのだろうか。それは月に1回定期的に行う「ハウス会議」で話し合うという。出席は自由、コロナ禍への配慮もありオンライン参加者も多い。議長と書記は立候補制、終了後は議事録を作成し、住民、フラットエージェンシー、家主の宮崎氏が共有する。一例として「掃除の話」を挙げてくれた。入

実家に帰ってみると「今まで自分の家の中で誰がどういう仕事をしているかを意識したことさえなかったが、ここで暮らすことで、自分の家族のかたちに気付くようになった」といった声があがった。「拡張家族」を経験することで、新たな気付きを得る住人も多いようである。

しかし、厳格なルールを決めず多くのことを自分の裁量で行うのは、自由なようで実は面倒くさいことの連続ではないだろうか。誰かに決まりをつくってもらい、それに従う方が楽に暮らせる部分もあろう。そう聞いてみると、山倉氏も大きく頷いた。「そうなんです。きちんと生活することは本来とても面倒くさい。でもそれを互いに意識し合いながら暮らすことが大事なのかな、と。もうひとつ、拡張家族で大事なことに、後ろ姿を閉じない」という言葉があります。自分が経験したり、思ったことを発信せずただ閉じてしまったら、誰にも見えません。相手を家族と試してみることで生まれた自分の気持ちや自分のものだけにしておいてもいいけど、後ろ姿だけは見せておいてね、と言うんです。親の背中を見て育つ」と言いますが、後ろ姿を見せておいてさえもらえれば、黙っていても受け取る人がいますから。C i f t が大切にしている「対話」と「自分の裁量で動く」ことは、ともすると矛盾が生じてしまうこともあり得るが、この「後ろ姿を見せる」こと、すなわち他者に対し閉じない努力ができることこそ重要なのだろう。その意識が働かなければ、



食事も自由につくりたい人がつくりたい分だけつくる。また、食農プランナーでもある山倉氏がマネージャーを務めるだけあり、食材も実に豊富だ。庭では、自分が育てたいと思った野菜やハーブなどが植えられており、その収穫も楽しみのひとつとなっている。



ハウス会議だけでなく山倉氏と橋本氏、そして家主の宮崎氏とのコミュニケーションも密に図られている。また、Ciftメンバーも、一般的な対話を通して様々な問題点を解決していく努力を惜しまない。ちなみにフラットエージェンシーの社員も居住者のひとり。社員教育の場としても利用されている。

居当初、共有部分の清掃は業者が担当していた。面倒な水回りもやってもらえるとあって最初は喜んでいた住人たちが、その清掃方法に不満が生まれた。何度か意向を伝えたが、まだ不満が残る。先方にどう伝えればいいのかを話し合っていた時に、住人の学生からコロナ禍でバイトが思うようにできないという声が聞かれた。そこで出てきた提案が、その学生に清掃の仕事を発注する「ハウス内アウトソーシング」だ。本人もやりたいということでも実現したという。その結果どうなったのだろうか。「彼女が掃除上手ということもあって、私たちの不満も解消されました。面白いことに業者の人がしていた時には当たり前のことと思ってい

いくら空間をシェアしていても「自分ごと」と思えるまでの他者との新たな関係性は築けないのである。

また「新しい実験」であった一般居住者との暮らしについても、学ぶことは多いが「C i f t だから」「一般だから」と分けるものではなく、最近では一般居住者とC i f t 居住者がルームシェアをするケースも現れたという。「C i f t も次の段階に進んだという気がします」（山倉氏）。「拡張家族」のあり方がさらに拡張していきそうである。

今後の展望について

最後に、住まいや暮らし方についての取り組みなど、今後の展望をお聞きした。

橋本氏にとってこれまでは貸主、借主は「お客さま」という立場であったが、今回自分たちも対等な立場で仲間として住まいづくりに取り組んでいると実感したという。

「京都には伝統家屋がまだたくさん残っています。そういう家のよきを残しつつ、時代に合った令和の京町家をつくっていききたいという思いがあります。今回の事例をモデルケースにし、さらに進化させた案件をC i f t さんと共同で進めている段階です。建物も古いものに限らず、どんな物件でもやってみたいと思っています」山倉氏は、今後は「借りたいから探す」ではなく「自分の暮らしに添ったものを見つめる」

といったように賃貸のニーズやマッチングの方法が変わってくるのではないかと話す。

「京都では自分の建物を役立てたいというギフトエコノミーの意識をもっておられる方も多いので、フラットエージェンシーさんと京都らしい取り組みができるのではないかと思います。

また、拡張家族のようなかたちで人が住むという実験は、どの世代にも必要だと思っています。個別化が進んでいる若い世代はもちろん、近い未来の私を含め、老いた自分たちが、どのように暮らしていくか、そういう対話が生まれるような実験の場があればいいのではないのでしょうか」



山倉あゆみ（やまぐら・あゆみ）
1978年、新潟県生まれ。2002年、㈱フラットエージェンシーに入社。宅地建物取引士、賃貸不動産経営管理士、不動産コンサルタント、経営マスター、上級相続支援コンサルタントなどの資格を持ち、現在はプロバティマネジメント部長として、多くの物件の管理運営に携わる。「京都下鴨修学館」のリニューアルに際しては家主、建築士、C i f t スタッフ、フラットエージェンシー建築部および本部・営業部の取りまとめを行う。

住まいを開いて、まちを元気に

——公民連携による市営住宅の新しい形

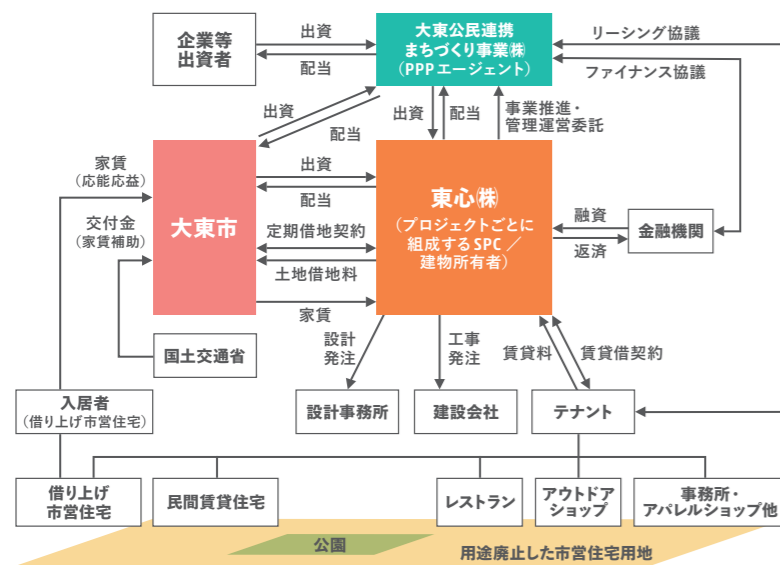
インタビュー 入江智子 「大東公民連携まちづくり事業株式会社（コーミン）」代表取締役

脇坂敦史「取材・執筆」
Ayumi「撮影」



上／飯盛山に近いオープンな敷地。中／壁面の塗装の色味にもこだわった住宅棟。各戸の玄関は中庭を向き、住民同士のコミュニケーションが図られる。下右／ガラスサッシの引き戸の玄関。下左／リビングインの開放的な間取り（このみ写真提供／コーミン）。

■ 図1：morinekiプロジェクトの事業スキーム



整備にあたって全国でも先進的な公民連携（PPP＝Public Private Partnership）の手法を導入したことで注目されている。

その仕組みは、入札や従来の第3セクター方式ではなく、あくまで民主導で資金調達から建築、所有、運営まで一貫して行うユニークなもの。具体的には、市と民間運営企業（市も出資）が共同で物件の所有会社を設立し、その会社が市からの借地に物件を建て、管理する。民間の運営会社が明確な事業展望のもと、金融機関から借り入れを行い、採算性と透明性を担保した

経営を行えるのが大きなメリットだ（図1）。「当面、住宅棟はすべて、もとの市営住宅の住み替え物件として市に借り上げてもらいますが、その後は協議のうえ順次、民間賃貸住宅に切り替える計画です」

事業を機に大東市職員から転身し、現在は運営を担う大東公民連携まちづくり事業株式会社（以下、コーミン＝略称）の代表取締役を務めるプロジェクトのキーマン入江智子氏は語る。

「以前の市営住宅は住民の減少で空き室も多く、風呂もない耐震性の低い平屋・2階建て・5階建

ての物件でしたが、国の補助金などを使った一般的な市営住宅の建て替えであれば、デベロッパーの手ではほぼ100%、高層のRC造*2になったでしょう。でも、『四角い箱みたいな公営住宅はもういらぬ』『外からこの地域に住みたいと思ってもらえるような場所にしたい』という住民や地域の声は当初から根強く、これに対応するためにまったく別の解を探し求めた結果、現在の形になったわけです」

あえて低層建築にし、住み替え分に対応した戸数にしぼったのも、事業としての採算性を考

まちという存在が、人々の集まり住むことで生まれるものである以上、個々の住まいとまち全体の営み、活気、文化、その未来に深い関係があるのは当然のこと。とりわけ、存在の大きい集合住宅のありようは、まちのイメージを鮮やかに変える力をもっている。

老朽化と住民の高齢化により、既存の公営住宅をどうするかが課題となる現在、公民連携という新しいスキームで注目されるのが大府大東市の morineki プロジェクトだ。

核としての集住施設を地域へ積極的に開いていくことの意味と価値、それにより進化するまちの姿を、同プロジェクトの中核を担う入江智子氏にお聞きした。

青空のもと萌える新緑に輝いているのは、生駒山地の北端に位置する飯盛山。真新しい低層の木造住宅からは、その姿が思いのほか近くに迫る。間近に感じるのは、山だけではない。すべての住戸が面する中庭は、ゆるやかな通路として中心にある芝生の広場へとつながり、物理的にも心理的にも隔てられることなく周囲のまち並みへ自然に開かれていく。

ここ「もりねき住宅」は、大東市の市営飯盛園第2住宅跡地にこの春オープンしたばかりの複合拠点、morinekiプロジェクト「1」の中核をなす住宅棟。約1ヘクタールのプロジェクト敷地には、ほかにアウトドアショップやレストランなどが入る商業棟と、オフィス棟もあり、



上/北欧テイストで統一された商業棟には、店舗とオフィスが入る。中/広々とした芝生公園。下/イトインもある焼きたてパンの店は地域住民の語らいの場に。

えたうえのこと。プロジェクト全体として調和のとれたランドスケープのデザインも、民間サイドが基本設計に参画することで初めて可能になった。

境目のない住居への戸惑いと誇り

木造でリーズナブル、お洒落な低層住宅というだけではない。一見して、住戸自体がとても開放的なつくりになっていることに驚かされる。玄関はガラスサッシの引き戸であり、1階住戸ではその前に縁台を思わせるベンチが置かれ、2階、3階も共用廊下というよりベランダがそのまま共用階段と直接つながるようなイメージ。玄関を入ってすぐに広い空間があるリビンググ

ンの間取りは、閉鎖的になりがちな一般の共同住宅とは大きな違いだ。

「必要以上に境目をつくらないというのは、設計をするうえで大きなテーマのひとつでした。それぞれの家の前はセミプライベート空間で、玄関前のベンチで日なたぼっこをするお婆ちゃんに話しかける人もいたり、住民間のコミュニケーションを重視したつくりといえます」

日本家屋の縁側とか、長屋のゆるい仕切り方など、かつてあったコミュニティ感覚を活かした現代的な集合住宅ともいえるだろうか。一方で、プライバシーを気にする住民の声はないのかという疑問もわく。

「もちろん、そうした声はありました。事前に図面で説明してあっても、いざ住んでみて驚い

どが前の住宅の頃からの顔見知りですが、一方で独居のお年寄りも多く、部屋の中で何が起きているのかわからないことが一番心配です。せっかくのオープンな造りですし、介護のためのヘルパーさんなども含めて、いろんな人に関わってもらいながら、安心して暮らしてほしいと思います」

地域との接点としての広場＝公園

公民連携というスタイルを端的に示すのが、住宅の中庭に隣接する芝生広場の統一的なランドスケープデザイン。この部分は公園として現在も大東市が管理する土地であるが、そう指摘されなければまったく気づかないほど一体化されている(図2)。

遊具などはないが、広々とした芝生の美しい空間であり、ただ座っているだけでも心地よく、アイディア次第でさまざまな目的に使えるそうだ。この公園が住宅棟と商業棟、あるいは周囲のまちをつなぐ重要な結節点を担っていることは間違いない。

「現在は市の委託を受ける形で、コーミンがこの公園の管理作業をしています。市から受け取る管理費は一般の都市公園に準じる額なので、手のかかる芝生をきれいに維持するには少し足りませんが、それを負担してでも、公園があることのメリットは大きいと考えています」

住民にとっては憩いの場となり、公園に面し

たテナントであるカフェやレストランなど店舗の価値もぐんと高まる。そうしたわかりやすい理由に加え、公園が周辺の住民にとって魅力的な場所であることは、morinekiプロジェクト全体が地域に向かって開いていくうえで重要な意味をもつという。

「すでに、ここでヨガイベントができないとか、吹奏楽の黄昏コンサートができないだろうか、との相談も寄せられています。一方では騒音問題や駐車問題も出てきますし、開かれた場所として地域全体の意向を無視するわけにはいきません。そこで、どう一緒に使うか、ご近所の皆さんも交えて相談しましょうと、定期的な会議を開くことになりました。公園を中心に地域の未来を考えようという趣旨で、私たちは『morineki未来会議』と呼んでいます」

そうした関わりを通じて地域の声を聞いてみると、新しい店舗棟、オフィス棟の評判が非常にいいという。北欧風のレストランやおいしいパン屋、女性向けライフスタイルショップ、アウトドアショップ、手づくり工房……。もちろん、店を利用してきてうれしいという話もあるが、それだけではない。夜は遅い時間までカフェに灯りが点り、閉店後のショップでもショーウィンドウには温かな照明が残る。それ以上に、これらの店舗やオフィスで働く若い人たちがつくる明るく元気な雰囲気、まちにとっては大きな意味をもつのだ。

「うれしいのは、地域の住民の方たちがすでに

たという人は多く、『こんなスケスケで、無防備なところに住めるか』なんて(笑)。でも全体としては、周囲の注目度も高くて、困惑しつつもちょっと自慢だという人が多いですね」

境目をなくし、住宅棟すべてが中庭に向けて開かれた設計の意図は、住民が互いに見守ることによって支え合うコミュニティの力を高めることでもある。実際、あやしいな訪問販売業者が出入りしているとの情報が、すぐに広まって被害の拡大を防ぐなど――そうしたコミュニケーションが、ひとり暮らしの多い住民の「おひとりさま力」を高めていくという面は大きい。悪意の侵入者が一番嫌がるのは、互いに声をかけ合うご近所付き合いなのだから。

「幸い、ここは建て替えのため、住民のほとん

こうした店舗を応援する形で、まちの未来を考えはじめていることです。敷地に隣接する空き店舗の利用方法が話題になったとき、せっかくのイメージを壊さず、さらに雰囲気のあまるまちにするにはどんな店がいいんだろう?と話し合ってくださいました」

入ってほしい会社を選び、長期契約

JR片町線(学研都市線)の四条畷駅しよじょうから徒歩5分。立地としては悪くないにせよ、企業が進出を争うというほどの場所ではない。では、商業棟やオフィス棟のテナントは、どうやって探したのだろうか? 安直な方法なら、店舗には全国的に知名度の高い飲食チェーンを入れるという選択がちだし、オフィス棟には自治体の施設を入れてしまう。特に後者は、従来の3セク方式などでテナントが入らなかつたり撤退してしまうリスクがある場合、最終的に自治体の家賃を保証することで、悪しき帳尻合わせになるケースが少なくない。

これに対し入江氏が選んだのは、物件の特長に合致し、先方でもそれを求めている企業と長期の契約を結ぶというやり方。そうすることで、プロジェクトにとっての独自性、テナント企業のメリットを追求しつつ、空室のリスクを最小限に抑えようと考えたのだ。

「入っていただくなら、ライフスタイル系の、日常生活を豊かにするような会社という希望は

おぼろげにもっていました。あとは店舗として、飲食のほか、パン屋さんもできれば欲しい。そうしたところへ、子育てママ世代に向けて北欧風のライフスタイルブランドやレストランなどを展開するノースオブジェクトさんが、思いきって本社ごと移転してくれたんです。もうひとつは、アウトドアブランドでイベントなども積極的に開催しているソトアソさん。レストランも、パン屋さんも、ショップもイベントも……本当に運がよかったとしかいいようがありません」

もちろん、融資する銀行の側としては、お洒落なブランドがテナントに入るというだけでは十分ではない。そこで、こうした企業のニーズをしっかりと聞き取りながら、より長期的な関係を目指しての契約を結ぶ必要があった。

「コロナ禍もあって、中心部への企業集中が大きく転換しようとするタイミングとも重なり、本社移転をしてくださった企業の皆さんにも喜んでいただけました。スタッフのなかには、ご自宅も大東市へ移したいという声も多いとのこと、その面でも地域との新たな関係を築けるのではと期待しています」

銀行への償還スキームとしては、企業が支払う安定的なテナント料と借り上げ市営住宅の賃料により、20年間という短めの償却期間を設定。住民が代替わりした段階で物件自体をできるだけ早く民間賃貸住宅へ切り替えていくという、独特の方法論が際立っている。

「りねき住宅」がまちのシンボルとしての役割を果たすはずです」

小さくたたみつつ、まちの価値を上げる

「市の職員だった当時、市営住宅の建て替えや維持管理といった仕事をしながら、人口減少と税収減のなかで、市が直面する課題についても明るい未来を描けずにはいられませんでした。そんななか、2015年に旧飯盛園第2住宅のPPPによる建て替えが決まり、コーミンへと出向。プロジェクト全体の中心を担う物件の所有会社、東心株式会社社長の鈴木竜次さんにお会いして意気投合したことが、今日につながっていると思います。ご自身も住民である鈴木さんと一緒に、本当に住みたくなるような市営住宅のあり方を考える日々は、本当に刺激的でした」

結果、3年の出向期間を半分残した時点で市役所を辞め、コーミンの代表取締役になる決意をした入江氏。もうひとつの転機となったのは、公民連携の手法が全国的に知られるきっかけとなった岩手県紫波町の地域活性化プロジェクト「オガール」*6の手法を現地で学んだ経験だ。2016年4月から9カ月間、市長の肝いりで派遣された現地で驚いたのは、民間の事業者として仕事をする心地よさだったという。

「放っておくと業者の側が手抜きをするかもという、役所流の“性悪説”でなく、互いの信頼に基づいて仕事ができるというのが新鮮な喜び

「新規の事業をPPPでやる以上、金融機関の信用を得るには、民間並みの確かな事業モデルを提示しなければなりません。従来の3セクにありがちな『最後はどこかが後始末をしてくれる』という甘えの構造では通用しないという点も、公民連携だからこそではないでしょうか」

まっとうな「大家」として地域と関わる

従来型のゼネコンなど民間主導の再開発プロジェクトの場合、ハコが出来上がってしまえば、それでひとつのストーリーは終わってしまいが、公民連携で行うmorinekiの場合はそこからが肝心と入江氏は考えている。

「プロジェクトの最初から、入札による丸投げにはしなないと心に決めていました。デベロッパーや建設会社だけが潤い、あとは放りっぱなしという再開発ではなく、まっとうな“大家”として住民と地域を長い目で見つめていきたいかったです」

当面の課題としては、高齢の独居者が多い住民の生活をどう見守っていくか、入居者の生活をどうやって“ジャンプアップ”させ、将来的には地域全体の価値をどのように上げていくか、住生活における豊かさや質の向上を目指す挑戦は始まったばかりだ。

「全国でも珍しい例だと思うのですが、コーミンは2019年から大東市の基幹型地域包括支援センター*3業務も受託しています。お年

でした。そうした経験を踏まえ、morinekiでも設計の大島芳彦さんはじめ『誰よりも忙しい、この人に依頼したい』と思える方々と組んで仕事できたのは何よりの財産ですね」

さまざまな制約があるなか、morinekiのような明確な世界観を構築するポイントは何？との問いに、入江氏は意外にも「聞きすぎないこと」と答えてくれた。多くのニーズを掘り起こそうとすると、あれも欲しい、これもできると広がっていくのが常。だから、これだけは譲れないところまで「欲望はそぎ落とす」のが重要だという。

「morinekiの場合は144戸の建て替えでしたが、当時ここに暮らしていたのは約80戸でした。であれば、最低限その人たちが安全・快適に暮らせる場所を新しくつくる。市としては高層にしてもっと戸数を増やしたいとか、子育て施設も欲しいとか、欲が出てきますよね。でも、それをやってしまうと結局、公園は狭くてもいいとか、木造では無理とかいう話になり、当初の目的を果たせなくなってしまうんです」

住民以外にも広く地域の人に喜んでもらい、ほかのまちからも移住したいと思えるようなエリアに育てる。当初から描いていた、シンブルだが難しい課題に集中した結果、morinekiでは市営住宅としての総戸数を減らす一方、地域の価値は高めるといふ、現代日本が最も必要とするスマートな解を導き出すことができた。「地価の高い都心や、逆に限界集落のような場

寄りの抱える問題というのは、必ずしもデイサービスなど専門窓口に橋渡しすればいい、という単純なものばかりではありません。場合によっては、医療機関や保健所、市の生活福祉課と相談し、連携する必要があるケースもある一方、私たちの会社が企画しているいろいろなイベントに誘ったり、きめ細かいケアを実現したいと考えています」

多くの人が将来にわたって望んでいるのは、やはり自分の住む場所とつながり、関わり合う生活だ。それも「もりねき住宅」のように、目に見える形で開かれた場所だからこそ、行いやすいといえるかもしれない。

「私自身はもともと市の職員で、建築技師の立場で働いていましたが、皆さん、イベント屋と誤解しているフシがあるんですよ(笑)」

そう語る入江氏は、コーミンに出向して間もない2017年7月から「住道駅周辺活性化プロジェクト」、通称「大東ズンチャツチャ夜市」を企画・開催している*4。ライブ演奏を聴き、地域のお店の味をその場で体験し、買い物も楽しむコンセプトは、単なる一時的な集客を超えた長期的な視点でまちの活性化を目指すものだ。「ほかに、地域の楽しみ方をさまざまに紹介するPR誌の発行なども、新たな住民として期待する若い人たち——私たちは“すっぴん女子”*5と呼んでいます。そうした層にアピールすることを大きな目的としています。そこでは当然、償還を終えて民間賃貸に切り替わる『も

所では無理かもしれませんが、日本の多くの自治体が課題とする古くなった公営住宅のたたみ方、しまい方として、参考にしていただけないでしょうか」

高層マンションや公営住宅の建て替え、再開発は従来「より大きいものをつくること」が、正しい」というモデルのなかで行われてきた。それとは逆に、小さくたたむことで生まれる豊かさを地域に向けて開いていけば、これからの住まいの内と外はきっと変わっていくだろう。

注

- *1 大阪府大東市の市営飯盛園第2住宅跡地に整備され、2021年3月にオープンした複合施設。名称は、森(飯盛山)のねき(河内弁で「近く」を意味する)に由来することによる。
- *2 Reinforced Concrete Constructionの略で、いわゆる鉄筋コンクリート造のこと。
- *3 地域の高齢者の総合相談窓口として、介護予防や医療の向上、福祉の増強を包括的に支援する厚生労働省所管の機関。うち基幹型は、各センターの総合調整と後方支援を行う。
- *4 月1回の開催。感染拡大予防のため、2021年5月時点で休止中。
- *5 「心がすっぴんな人(男性含む)」として、①良いモノを求める、②アクティブで世話好き、③正直で飾らない、④地域での暮らしを楽しんでいる、人々をイメージ。
- *6 公民連携の再開発により注目を集めた複合商業施設。飲食店・販売店・ホテル・図書館・クリニック・町役場など多くのサービスを集約する。



入江智子(いりえ・ともこ)

大東公民連携まちづくり事業株式会社代表取締役・まちづくり事業部長。1976年生まれ。京都工芸繊維大学卒業後、大阪府大東市に入庁。建築技師として、市立学校や市営住宅などの営繕業務に従事。オガール暖簾分け研修を経て、2017年「稼ぐ公民連携」のエンジン役となるまちづくり会社を立ち上げ出向、その後市職員を退職し現職。民間主導の市営住宅の建て替えによりエリアの価値を上げる「morinekiプロジェクト」の取り組みを通じ、公営住宅革命に挑戦中。

住まいのサブスクリプション

―都市と地方で人口をシェアする

「株式会社アドレス代表取締役社長」

佐別当隆志

Takashi Sabeto

奥山晶子||取材・執筆

リモートワークの普及を背景に、場所にしばられない働き方が広がるなかで、複数の家を転々としながら暮らす「多拠点居住」に注目が集まっている。全国の物件に住み放題となるサブスクリプション(定額課金)サービスを展開するベンチャー企業「ADDRESS」の代表・佐別当隆志氏は、都市と地方の両方に暮らす新しいライフスタイルが、「全国創生」の糸口になるという。多拠点居住サービスの仕組みと、その未来像についてお話を伺った。

近年躍進するサブスクリプションと

「ADDRESS」の存在感

月額料金などの定額を支払い、サービスを利用するサブスクリプション(以下、サブスク)。近年、動画や音楽、電子書籍といったコンテンツ利用に限らず、ファッションや家具、家電、車などを定額で利用できるサービスも目立ってきた。市場規模は2019年に1兆円を突破し、2023年には約1.4兆円にまで拡大する見通しだ。

2018年創業のADDRESSは、住まいのサブスクを提供する会社だ。全国に一軒家や提携宿泊施設の住まいを設け、月額料金を支払って会員になれば、どの家でも滞在できる。ほとん

どの家が個室を利用でき、シャワーやトイレ、キッチン等は共用。本格的なサービス始動の2019年10月末には20カ所だった物件数が、2021年5月には160カ所超となり、全都道府県での滞在が可能になった。また、会員数も1年半で5倍に増加した。急成長の背景にあるのが、コロナ禍によるリモートワークの急速な普及だ。「会社に毎日通わなくてよいなら、家賃の高い地域に住む必要はない」と考える人の都心離れは、各メディアでも取り上げられている。また、いつとき自宅を離れ、景色のきれいな場所でストレスを緩和しながら仕事をする「ワーケーション」も注目されている。佐別当氏は言う。

「コロナ前のメインターゲットはフリーランスや自営業等、働く場所を自分で決められる人でした。しかしコロナ禍の今、会員の半分以上を社員が占めています。テレワークできる社員が、月に数度は出張しながら主都市部近郊の家を回るようなワークスタイルをとっています。よって人気の家は長野や山梨、静岡、千葉、神奈川、大阪、京都、奈良など、都心から1、2時間で行けるところです」

近年、全国各地の宿泊施設と提携して「月額制でホテル泊まり放題」とするサービスは増えているが、ADDRESSは単なる住まいの定額サービスを提供したいわけではないという。

「我々のスローガンは『全国創生』です。多拠



アドレス代表取締役社長の佐別当隆志氏。若い頃から寮やシェアハウスでの生活を経験しており、現在月の半分ほどは各地域を回り多拠点居住を楽しんでいるという。写真提供/株式会社アドレス

点居住を通じて日本中のコミュニティに新たな関係をつくり、活性化させるライフプラットフォームを提供しています。ADDRESSの家を一時的な観光やワーケーションのための滞在先として使用するのではなく、暮らしながら会員や地域の人々と交流し、豊かな地域体験を得るための場としてほしいのです」

「ADDRESS」が提供する多拠点居住サービスの内容

ADDRESSでは、契約期間1年間、最低利用3カ月という条件のもと、月額4万4000円

(税込)を支払って会員となれば、全国どの家にも滞在できる。電気代・ガス代・水道代は全て込み、WiFi・個室の寝具・キッチン・調理道具・家具・洗濯機が全ての家に共用で完備[*1]されている。敷金・礼金・保証金などの初期費用は一切ない。

WEBの会員ページから3カ月先まで予約ができるが、同じ部屋を連続で押さえられるのは7日間まで。ほかの家を含めても、同時に予約できる日数の上限は合計14日までで、1日消化すれば、また新しく1日分を予約できるようになる。このシステムだと、同じ家に長期滞在したいと考えても難しい。これはなぜだろう。「そもそもコンセプトが地域定住ではなく多拠点居住なので、多拠点利用を目的とする人が予約しやすい形をとっています。ただ、特定の家が気に入る、そこへ自分のスペースを確保したい人もいます。その場合はオプションの『専用ベッドプラン』を利用してもらいます」

「専用ベッドプラン」は、月額1万6500円(6万6000円(税込)をプラスして、個室かドミトリ(2段ベッド等がある相部屋)に自分専用のベッドを確保しておけるものだ。郵便物を受け取ったり、住民票を移したりもできる。また、ほかの家を利用する期間が月7日以内であれば、基本料金が割安になる。契約条件として、契約までに「専用ベッドがある家での滞在が発発日を除き合計3日以上ある」「専用の家以外のいずれかの家で滞在履歴が1日以上あ

る」などが課される。

「会員の6割は固定の住居も別に持ち、1カ所あたり平均して3日ずつ滞在し、3カ所から5カ所を回することで月の半分程度を多拠点生活にあてています。残りの4割は自宅を持たず専用ベッドプラン等を契約しています。性別比率は男性が6割、女性が4割。年代としては20代、30代が多いですが、60代以上の会員も7%を数え、日本に居住する外国人の会員もいます」

世帯構成としてはシングル層も、ファミリー利用も半々程度見受けられるという。

「二親等以内の家族と固定のパートナー1名は、追加費用なしで個室利用OKとしているので、就学前の子どもにさまざまな体験をさせたいと利用する家族がいます。子どもが小学生以上であっても、デュアルスクール[*2]を利用してADDRESS生活をする珍しい例もあります」

ほかにも、コロナ禍により授業がリモート中心となった大学生が、バックパックスの代わりにUber Eatsの配達リユクを背負い、お金を稼ぎながら全国を回って多拠点居住を楽しんだり、コロナ禍で夫や子どもが常に家にいることをストレスに感じた主婦が、平日はADDRESSの家でのさまざまな交流を通してリフレッシュし、週末だけ自宅に戻って家族と過ごすといったユニークな利用例があるという。また地方創生系のビジネスをしている人にとっては、情報収集の場にも、滞在先にもなる。

「広島県尾道市では行政と提携を行い、地域お



「日南A邸」の家守、杉本恭佑さん。滞在の受け入れを行い、周辺紹介など会員の暮らしをサポートする。共有部分の衛生面の管理といった役割も。写真提供/株式会社アドレス

宮崎県日南市の商店街にある、もと八百屋を大型リノベーションした「日南A邸」。1階は1960年代から80年代のレコードを集めた地域の誰もが利用できるコミュニティスペースで、隣には会員専用のコワーキングスペースも用意されている。2階は相部屋の居住スペース。周辺の海ではマリンスポーツを楽しめる。写真提供/株式会社アドレス

住したり、Uターンやイターンという形で地域づくりに携わる人が増えました。震災前は東京で働いていた20代、30代の若者たちが地域で起業したり、ゲストハウスを経営したりといった取り組みを始めて10年ほどが経ち、『都会のことも知りながら、地域で事業をしている30代、40代』の活躍が目立つようになってきています。そこへ『地域で面白い事業をやっている人たちがいる』と敏感に反応しているのが、20代、30代のミレニアル世代です。小さな頃からインターネット環境のなかで育ってきた彼らの価値観は、これまでとは違うところがあります。テクノロジーの進化により、ネット環境があればどこでも仕事ができるケースが増えました。今後、テクノロジーの進化によって、自動運転など移動手段が発達・多様化する可能性も大いにあります。このような環境に身を置く彼らは、従来の「東京に住み、高い家賃を払って大きな企業で働く」価値観ではないライフスタイル・ワークスタイルを求めはじめていると感じてなりません。また、彼らミレニアル世代は、家や車を購入して所有したいという気持ちを強く持った代わり、都心部ではシェアハウスに入居したり、カーシェアリングという形で車を利用したりと、『所有』より『共有』を選ぶ傾向があります。住まいに関しても所有ではなく共有を、しかも多拠点で生活しながらリモートで仕事もやるといったモデルに共感してくれる人たちは多いだろうと考えました」

従来なら都会で働くような若者たちが、テクノロジーを駆使して多拠点で仕事と生活を両立させたいと考えたときに、どんな地域でも普通に生活ができるようなサービスにしたい。それがADDRESSの構想につながった。「また、若い世代はできるだけ持ち物を少なくして、その代わり好きな物しか所有しないというミニマルな生活を好む傾向があり、かつ体験の価値を非常に重視する傾向があります。よって、いかに身軽なライフスタイルを楽しめるか、良い地域体験ができるかを心がけました」

会員の地域体験を支えているのが、各家に置かれている「家守」というコミュニティマネージャーだ。家守は物件の管理役、地域と会員のパイプ役で、家の利用について案内をするほか、観光をはじめとするさまざまな情報等を提供する。

「家守は、ADDRESSの大きな特長であり、欠かせない存在です。会員と家守と一緒に温泉に行ったり、地域のお店でご飯を食べたりと交流することで、会員は観光にただでは得られない体験をすることになります。地域と会員、そして会員同士の交流の架け橋にもなってくれます。物件のオーナーなど地元民のほか、地域おこし協力隊員、専用ベッドを契約し地域をよく知る会員がその役割を担ってくれることも。全国で400人以上ものエントリーがあります」

家守には形態によって数万円程度の報酬が支

こし協力隊の活動を行う間の滞在先としてADDRESSの家を利用できる取り組みを行っています。家賃補助が出るうえ、そこに住んでいるだけいろいろな会員が訪れるため、地域で孤立しないという利点があります。もちろん多拠点利用も可能です」

空き家の活用と「家守」の配置で地域活性と体験充実を

会員が訪れる家の多くは、空き家をリノベーションした物件だ。マンションや宿泊施設の一部を借り上げることもあるが、基本的には4LDK以上の戸建てという条件がある。リノベーション費用は家主持ちだが、空き家対策に

悩む自治体が補助を行う場合も多々あり、不足する家具家電はADDRESS側が揃える場合もある。オーナーは月額5万円から10万円ほどを家賃として受け取る仕組みだ(図1)。佐別当氏には、あくまで空き家を活用したいという強い思いがある。

「私は2016年にシェアリングエコノミー協会を立ち上げ、モノやスペース、スキル、時間といった資産をシェアする消費スタイルの普及に努めてきました。その活動のなかで、人口減少が進み、企業の撤退や若者離れが顕著な地方自治体から『いわゆる昔ながらの助け合いやボランティアではなく、経済活動が回る仕組みのシェアサービス活用を考えたい』『特に空き家

の有効活用と、都市から人が流れてくるような事業モデルをつくれなにか』という声を非常にたくさんいただきました。

そこで空き家が増えることをむしろポジティブに捉え、都市部の若者たちに低コストで素晴らしい地方体験を提供する住まいとして活用できないかと考えました。アイデアの背景には、私自身が多拠点居住に興味があったこと、今後は都市から地方へという人の流れが間違いなく活発化するだろうという見通しがありました」

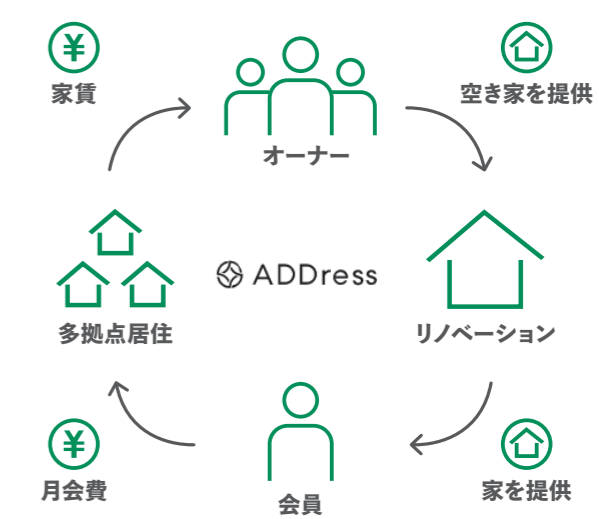
特に若い世代に「都市から地方へ」のニーズが強まっていると、佐別当氏は指摘する。

「東日本大震災後、東北の復興がたびたび取り上げられるなか、若者の間で東京から地方に移



広島県尾道市の「尾道A邸」は、地域おこし協力隊の専用ベッドとしても利用されている。この場合、2段ベッドタイプのドミトリーが使用でき、家賃の2/3が自治体負担となるため、自己負担は月18,000円程度となる。写真提供/株式会社アドレス

■ 図1: ADDRESS空き家活用の仕組み



各地域にある空き家や別荘などの物件をオーナーが初期の設備投資を行い、ADDRESSにサブリースして家の管理・運用をしてもらうことで価値を高める。オーナーは空き室リスクを回避し、安定した家賃収入を得られる。提供/株式会社アドレス



大阪府枚方市の「枚方A邸」。もとはADDRESS初期会員の家族が過ごしていた住居で、家族の退去に伴い空き家になったため提供された。昭和の風情を残す一軒家で、共用部分にはレトロな家具がそのまま残されている。写真提供/株式会社アドレス

今後力を入れていきたいのが、子どもが巣立った実家の活用だという。老夫婦だけでは部屋を持って余すような場合に、「空き家」というより「空き部屋」対策としてADDRESSの家となることを考えてもらうのだ。この場合、すでにその物件に住んでいる老夫婦が家主となる。現在も人が住んでいる家なので、初期投資はそれほどかからず、新しく家主を立てる必要がない。高齢者の見守りを兼ねられれば、老夫婦だけではなく、地域や離れて暮らす子世代にとっても安心ではないだろうか。

各人の能力を地方で活かす 関係人口のシェアで「全国創生」へ

佐別当氏が目指すのは「全国創生」だ。各課題を解決したサービス充実の先に、どのような展開を描いているのだろうか。

「地域の消費者を増やすのではなく、生産者を増やすことを重視するのが我々のコンセプトです。お祭りの担い手側として参加するなど、地域活動に関わる人をひとりでも増やしたいと考えています。会員それぞれの職能を活かした地域での仕事づくりもその一環です。『料理人×ADDRESS』として、料理人である会員が、地域の飲食店で生産者と交流しながら地場野菜を使って出張料理を行う取り組みが、すでに行われています。同じように、美容師が各地域の美容室で仕事ができるようにする、医師や看護師が訪問医療を行ったりその地域の病院で働いた

払われる。ADDRESSのHPで実際の家主として紹介されている人は、プロカメラマンやセラピストなど個性派揃い。「この人に会いたい」と思わせるような魅力がある。実際、「この家主がいるから、また行きたい」と言う会員もいる。

今後の課題は3点。交通コストの削減・利用期間の継続・物件の安定供給

事業開始から2年、見えてきた課題もある。「利用者の交通費をいかに下げていくか。もともと、多拠点居住の弱点として、移動費がかさむという問題は想定していました。飛行機や新幹線を使用すれば月々の利用料金よりも交通費の方が高くなる可能性は大いにあります。そこで、ANAやJRと連携してチケットのサブスクにおける実証実験を行いました」

ANAとの実証実験は、ADDRESSの会員が月額3万円を追加で支払うと最大2往復まで搭乗可能となるもの。JR西日本との提携内容は、指定地域への往復を割引チケットでサポートするもので、JR東日本では会員への「えきねっと」ポイント還元を行った。JRとの提携期間は終了しているが、ANAとの提携は継続して取り組んでいる。

「現在は各交通系の事業者と、どんなプランを正式メニューにできるか検討中です。月に1万円から2万円程度で交通費が収まるとなれば、利用しやすくなるのではないのでしょうか。飛行

りするなど、さまざまなスキルを持った人が他拠点で活躍できる仕組みを整えていければ、都心では当たり前のサービスが、スキルを持った人の多拠点居住によって地方でも受けられるようなプラットフォームに成長します」

また、各地域の生産者とながり、観光者として見るだけではなく、実際に働いてお金を得ることで手に入る貴重な経験も提供していきたいという。

「実は先日、三崎でマグロの卸問屋を見学したのですが、そこで『繁忙期は一週間単位でもいいから働いてくれる人が欲しい』という話を聞きました。冷凍マグロをさばいたり、箱詰めしたりといった光景は圧巻で、都会暮らしをしていたらまず見ることはできません。ほかにも、例えば月に幾日かだけ田舎暮らしをしたい人を、耕作放棄地に悩む農家へ紹介するようなことができると思っています」

得難い経験をというニーズと、人手が欲しいという想いを、多拠点居住のシステムでマッチングさせるといわけだ。移住したわけではなく、単なる観光に来ただけの人でもなく、地域と関わる人々のことを「関係人口」と呼ぶが、佐別当氏はこの「関係人口」を多拠点居住システムで各地に「シェア」することによって、「人口のシェアリング」をはかり、「全国創生」へとつなげる狙いだ。

「2030年には、世界人口の10%が多拠点居住を行っているという予測もあります。日本の

機・電車・家賃も含めて合計で10万円程度のプランであれば、都市生活者に受け入れられると考えています」

また、利用期間を継続させることも今後の課題だという。

「3カ月、半年でやめてしまうケースが多いと、観光の延長線上にしかありません。長期で利用して、地域にコミットするような利用が増えることが理想です。入会プロセスを大幅に変更し、長期的な多拠点利用をしていただける方を中心にして、会員のコミュニティの価値を高めていっています。また、その対策のひとつとして始めたのが「部活」。会員と家主が3人以上集まると、公式の部活になります。現在、酒蔵を回る日本酒部、カレー部、学生部など、20程度の部活が立ち上がっていて、会員や家主、スタッフがウェブ上に「ADDRESS部活通信」をアップしています。こういった交流サポートを通して新しい共同体を支えていきたいです。

さらに物件の安定供給も課題になりつつあります。会員数が大幅に増えてきているので、サービスの価値を高めるためには、利用者が滞在を希望する地域に、もっと多くの家が必要です。ただ、物件を増やすということは、家具家電を揃えるための初期投資がかさむということ。メーカー側に働きかけ、新商品をトライアルで、あるいはマーケティングの一環として置いてもらうといった工夫をしています。いかに初期投資を抑え、物件を増やせるかが課題です」

10%といえど1200万人です。今後、たくさんの人が利用しやすい多拠点居住サービスをつくっていければ、1200万の関係人口を地域でシェアリングできる時代が来るかもしれません」

自分が関係人口として多拠点でスキルを発揮したり、その土地ならではの職業体験をしたりすることで、地域貢献できるのが嬉しいと感じる人は多いだろう。物品やデータだけではなく、「人のシェア」が全国の発展に寄与するという発想。シェアリングエコノミーの活動を第一線で担い、見つけてきた佐別当氏ならではの挑戦が、地方の、そして都会の若者たちの未来を変えていく。

注
*1 洗濯機と乾燥機は別途利用料金が必要。キッチンのない物件もある。
*2 都市部に住民票を置いたまま、保護者の居住期間に合わせて地方の学校に通わせることができるもの。2013年から徳島県教育委員会が事業として推進を始め、各地で導入の取り組みがある。

佐別当隆志(さべとうりゅうたかし)

㈱アドレス代表取締役社長。シェアリングエコノミー協会幹事。1977年、大阪府八尾市生まれ。立命館大学国際関係学部卒業。2000年、㈱ガイアックスに入社。広報・事業開発を経て、2016年、一般社団法人シェアリングエコノミー協会を設立し事務局長に就任。2017年、内閣官房IT総合戦略室よりシェアリングエコノミー伝道師を拝命。総務省シェアリングエコノミータスクフォース委員就任。2018年、経済産業省シェアリングエコノミーにおける経済活動の統計調査による把握に関する研究会委員。同年に定額で全国住み放題となるサブスクリプションサービスを展開する㈱アドレスを設立。2021年シェアリングエコノミー協会幹事に就任し、現在に至る。

楽しむ空間としての住まい

『SUUMO』編集長／SUUMORサーチセンターセンター長

池本洋一 Ikemoto Yoichi

奥山晶子 取材・執筆

古里麻衣 撮影

住まいの快適性や利便性などにスポットを当てた議論は数多くあるが、楽しみにして論じられることは多くない。「おうち時間」の充実が求められる今、住まいにおける楽しさの意味を改めて考えてみるべきではないだろうか？

そこで、住まいのトレンドを見つめ続けてきた、不動産・住宅情報サイト『SUUMO』編集長の池本洋一氏に、楽しむ空間としての住まいの今とこれからについてお話を伺った。

「おうち時間」を楽しむのは一時的な現象か

壁いっぱい本棚を設けた読書空間、ゲーム機が所狭しと並ぶ部屋、音楽鑑賞だけのためにしつらえられたオーディオルーム。住まいにおける楽しみというと、そうした趣味を満喫するためにつくられた部屋が思い浮かぶ。特に今はコロナ禍の影響で、「おうち時間」の充実を求める風潮にあって、ベランダにテントを張ってキャンプを楽しむ「ベランピング」（ベランダ＋キャンピング）、家飲みを満喫するための家庭内バーカウンターなど、家の中で完結する趣味や遊びの空間がもてはやされている。さまざま

まな要素が家の中に取り込まれていくなか、今後も「楽しむ空間としての住まい」は進化し続けるのだろうか？

「もちろん、住まいを楽しむ空間として活用するという動き自体は、今後も続いていくでしょう。でも、今のコロナ禍のような巣ごもり的な楽しみ方は一時的なものだと思うのですよね」

疑問をぶつけた池本氏からは、意外な言葉が返ってきた。

「家を開く」ことが、近年の住まいのトレンド

「コロナ禍がこれからも続くのかどうか、その問題はあるかもしれませんが、そもそも、個室を中心とした閉じられた空間で趣味や遊びを享受するというスタイルは、近年のトレンドからは外れたものではないかと私は考えているんです」

「住まいの中に遊びや趣味の空間を設けるということ自体、その起源や歴史についてはっきりとしたことはわかりません。でも、富裕層を中心に昔から行われてきたことかと思えます。それがある程度一般的になってきたのは、バブル経済の前後でしょう。生活に必要な白物家電などがそろって、生活にゆとりが生まれる中でさ

「住まいの中に遊びや趣味の空間を設けるということ自体、その起源や歴史についてはっきりとしたことはわかりません。でも、富裕層を中心に昔から行われてきたことかと思えます。それがある程度一般的になってきたのは、バブル経済の前後でしょう。生活に必要な白物家電などがそろって、生活にゆとりが生まれる中でさ

らなる豊かさを求めて家に趣味や娯楽の要素をプラスしはじめた。寝食を共にして団欒するだけの空間構成に変化が生じた時期です」

さらに、バブル以後に地価が下がり広い家を手に入れやすくなったことも、住まいの中に楽しむための空間を取り入れる流れを助長したという。おおよそ、1990年代から2000年代にかけて、こうしたムーブメントが一般的になったと考えるとよさそうだ。しかし、2010年前後を境にして、住まいのあり方に大きな変

化を与える出来事が起きたという。「ひとつは、2008年のリーマンショックです。これにより、新築のマンションや戸建ての住宅供給が激しく落ち込むのですが(図1)、そのタイミングで、同時に『リノベーション』という言葉も起こってきます。家は新築であることが最も魅力的であるという価値観から、もともとある建物をうまく活用するのは良いことである、かっこいいことであるという風潮が生まれてきました。

そしてもうひとつが、2011年の東日本大震災です。未曾有の災害を目にして、いつどこで何が起こるかわからない、それに備えるためには地域の中で知り合いをつくっておこう、地域のコミュニティを大事にしようといった、共助力の重要性が語られはじめました。そのなかで、周囲とのつながりを維持するための取り組みに積極的になる人が増えていったんです」

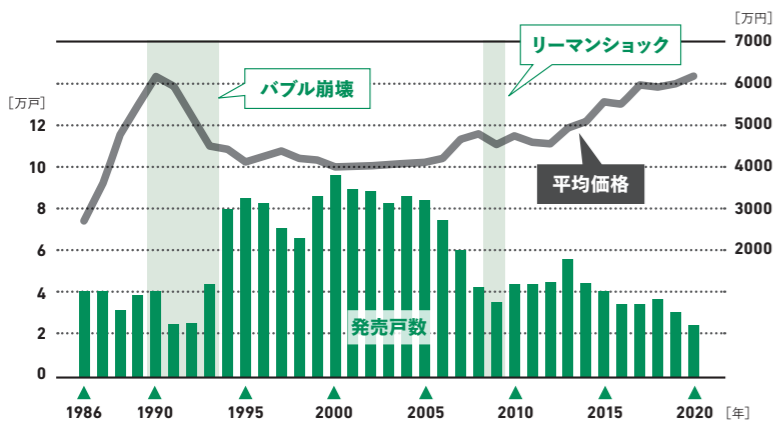
これらのふたつの要因により、これまでとは違った住まいへの意識が生まれた。それは、「今ある家を上手に生かし、地域の人たちと交わる装置として利用しよう」という機運だ。例えば、自宅をリノベーションして1階部分を週末カフェとして使ったり、作家がアトリエで作品展示を行ったり。家の一部の機能を地域の人がひととシェアするように活用しようとする動きが強まっていったのだという。

「こうした動きを見て、SUUMOでは『家を開く』というトレンド予測を提示しました。家をプライベートに閉じられた空間としてではなく、周囲とつながりを持つために開かれた空間として利用していく動きがトレンドになると考えたのです」

「家を開く」の最新事例 PLAT295

「家を開く」というトレンド予測を提示したのは2013年。文化活動家のアサダワタル氏が「住み開き」を提唱したのも同時期で、この頃

図1：首都圏マンションの平均価格と発売戸数の推移



リーマンショックの影響により新築マンションの供給が落ち込み、その後、発売価格はバブル期なみに高騰した。出典／不動産経済研究所調べ



コワーキングスペース、シェアオフィス、シェアキッチン、住居などが一体となった「PLAT295」。1階のシェアキッチンを外から見たところ。ガラス張りもオープンな雰囲気を後押ししている。写真提供／PLAT295

から住まいを開放しようという動きが注目されていったといえるだろう。その後もこうした実践例は増え続け、さまざまな進化を遂げているようだ。

そうした「家を開く」の最新の事例として池本氏が挙げたのが、スカイツリー近くにある東京・押上(おしあが)の「PLAT295」だ。2020年8月にオープンしたコワーキングスペースで、1階と2階を共用部分としてシェアオフィスに作り替え、3階から上を賃貸や居住スペースとしたものだ。

「これは築60年の2階建て家屋と、築40年のRC造ビル2棟の建て替えで、運営に企業が関わっている少し特殊な事例かもしれませんが、地域に開かれた場所にしようというビルオーナーの目的にそってつくられています。さまざまな人が出入りする1階のコワーキングスペースにはシェアキッチンが備わった多目的スペースが併設しており、上の階の居住者や地域の人々がカフェのように利用することができる。そこで老若男女問わずさまざまな人が集まってきて交流が始まり、居住者の子どもたちも地域の人々とふれあってお互いの顔を覚えたりする。地域の教育とか防犯とか、そんな問題にも寄与する場所になっているようです」

オフィス、交流スペースなどさまざまな機能を住まいの中に複合的に取り込み、人びとのつながりを生んでいく。こうした「PLAT295」のような「家を開く」事例は、全国の

値が高く、将来の売却時に値崩れを起こしにくい。しかしその分、購入時の坪単価も高くなるため個室はとれない。だったら、リビングでできることはリビングでやろうという発想になるということだ。

「限られた居住空間で無理に個室をキープするより、一番広くて、明るくて、通風もよいリビングで、各自好きなことをやる方がいい。人間、一番快適な空間に、長く居たいですからね。そんな風潮もあって、リビングの多機能化が進んでいったと思います。ちなみに、こうした流れをSUMOでは『リビ充(リビングの充実)』と呼んでいました。あまり浸透しませんでした(笑)」

こうした「リビ充」の例をいくつか紹介しよ



フリーライミングが趣味の家主が、リビングの吹き抜けにクライミングウォールを設置した事例。色とりどりのホールドが、デザイン的にも空間のアクセントになっている。
写真提供/有島忠男設計工房



大人の筋トレや子どもの遊び場として使えるように、リビングにうんていを取り付けた事例。カラフルなデザインのため、インテリアとしてもおしゃれ。
写真提供/リノベる株式会社



都内の交流型賃貸住宅「ネイバーズ目黒」にある共用部の個室型ワークスペース。24時間いつでも利用可能。
写真提供/株式会社グローバルエージェンツ

いたるところで実践されているという。

「こうした流れを見ていくと、『家を楽しむ』の意味も変わってきているように思えないでしょうか。個人だけで楽しむのではなく、地域の人たちとかかわり、共に活動することに對して楽しみを見出そうとしている。閉じるのではなく、開くという方向へトレンドは向かっていると思うのです」

ITツールの普及で変化した リビングを充実させる最先端の住まい

さらに池本氏は、「開く」というキーワードは、別の点においても最近の住まいのあり方の変化を把握するためのキーワードになっているとも言える。その変化が見られる場所は、リビングだ。

「リビングの中心にはソファがあったり、昔であればちゃぶ台、コタツがあって、そこに家族が集まって同じテレビを見ながら過ごす。こうした団欒のかたちが、長く日本のスタンダードでした。しかし2015年頃から、リビングでの過ごし方が変わってきました。そのきっかけは、ITツールの普及です。

家族はみんなリビングに集まっているけれど、同じことをやっているわけではありません。パソコンを使って仕事をしたり、スマホでSNSをしたり、タブレットで動画を見たり、携帯ゲームを楽しんだり、音楽を聴いたり(図2)。同じ空間にいながら、めいめいが別々のことを

う。例えば最近流行のボルダリングを楽しむために、ホールド(手でつかんだり足場にしたりする突起物)をリビングの壁に設置している例がある。ホールドのポップな色使いがインテリアのアクセントにもなり、SNS映えもすると人気なようだ。また、うんていを取り付けて、大人の筋トレや子ども遊び場として使ったり、キッチン脇にターンテーブルを設けてDJブースをつくったり、趣味や遊びの要素をリビングに持ち込む例は枚挙にいとまがない。

「もちろん、個室だからこそできる趣味もあって、それを充実させようということ自体は今も多くあると思います。でも、趣味のためのスペースが、個室でなければならぬということでは、もはやなくなってきているのではないで

行っている。これが現代のリビングのあり方なのです。イヤホンと端末があれば疑似的な壁ができて、自分の空間ができてしまうので、わざわざ個室で区切る必要性が薄れたといえます。これは個室という、家族の成員それぞれの閉じられた空間からの開放というように見ることもできます」

個室をわざわざつくるといった流れが廃れている背景には、なるべく駅近の都心に住みたいという昨今のニーズも見え隠れするという。利便性が高いことはもちろん、都心の物件は資産価値

でしょうか。こういった意味でも、住まいのかたちは変わってきていると思います」

さらに、コロナ禍によってテレワークが増えたり、飲み会や習い事にもオンラインの利用が活発化してきた。対面して、直接人を招き入れるわけではないが、他人に自分の家の空間を見られる機会は増えてきた。これもある意味、開くというベクトルのひとつと言ってもいいかもしれない。

「もちろん、それをすべて『開く』というワードでひとくくりにするのは乱暴かもしれませんが、実際に閉じる方向に向かっているものもあります。顕著なのはテレワークスペース。やはり居住空間と仕事の空間は分けたいと思う人が多いですし、特にオンライン会議などを行う

■図2:新しいリビングでの過ごし方



母親は仕事をしながら家族を見守り、父親はタブレットを見ながら息子と遊び、娘はスマホで音楽を聴きながら猫と過ごしている。好きなことをスマートに楽しめるITツールの普及がリビングを変えた。
提供/株式会社リクルート

時には、周囲の目や音から遮断された空間でやる方がいい。そのために、自宅にちょっとした専用スペースを設ける例は多いようですし、最近のコワーキングスペースなども共用空間だけではだめで、個室ブースをつけるようなことも出てきている。やはり機能や目的によっては、すべて開くのではなく閉じるという方向に向かっていくものもあると思います」

職住融合も視野のひとつに 急速に進む「住まいの民主化」

さて、トレンドは「家を開く」という方向に向かってきたが、コロナ禍によりその流れが堰き止められてしまっているように思える。それでも、池本氏は今後、家を開いて楽しむ方向に戻るといふ。なぜそのように考えるのだろうか。「コロナの蔓延がこれからどうなるかにもよるとは思いますが、いずれはこれまでの流れに戻るのが自然なのではないでしょうか。外で人と交わりたいたいという欲求は、人びとのなかですつと高まっていると思いますしね。そもそも、人とのつながりを持たなければいけないという危機意識の裏には、やはり地域のコミュニティの崩壊があって、防犯や教育といった例だけでなく、過疎化、空き家、防災といったさまざまな問題を解決していかなければならないという現実から生じたものです。だから、そのための取り組みは活発化していくべきだという願いもあります」。

別にも仕事を持ちながら、自分の店を持つ夢を叶え、地域の人びととの関係を深く築くことができているという。

さらに池本氏は、リーマンショック以降、「住まいの民主化」が進んできたことも、「家を開く」という住まいづくりが続いていく理由のひとつと見ている。

「UR、デベロッパー、ハウスメーカーなど、供給者の論理で住まいについて提案するというよりも、住まい手が自らの家のあり方を見つめ直すフェーズに入っていると感じます。ソーシャルメディアなどを通じてリノベーションやDIYの情報を得て、すぐに『自分もやって



「好きなことを自宅の一角で行い、それを地域の人たちに開くことで個人の暮らしはもちろん、街自体もずっと楽しくなる」と池本洋一氏。



上/東京都練馬区の「櫻の音 terrace」。下/2階に自宅兼アトリエショップを持つ「ちゃらっぽこ」。店主が日本各地を旅して出会った、日本の伝統文化を守る作り手による“手仕事雑貨”を販売している。
写真提供/つばめ舎建築設計

そう言ってしまうと、難しく堅い提言になっ

てしまいそうなのですけど、『家を開く』と言って取り上げてきた事例って、自分たちの好きなことをやりながら、楽しんで取り組んでいるものが多いと思うんです。家の中の一角に自分の趣味を楽しむ場所をつくって、そのスペースを地域の人と共有できるように広げて、さらには小商いを始めてみたり。そんな風なことを楽しみとして取り組んでいる人が多いのではないのでしょうか。そうした楽しい活動を通して、

みよう』と実践したり、『自分はこうしよう』と工夫したりします。つまり、主導権が供給側から住まい手側に、徐々に移っている。すると、そこに多様性が生まれ、進化の速度も上がってきます。このような住まいの民主化が、『家を開く』を後押しすると思います」

「自分が楽しい」がベースの住まいを

そうした事例を聞くと、「私も地域に開かれた楽しむための住まいをつくりたい」と考えるかもしれない。その場合、どのようにアプローチすればよいのだろうか。趣味空間の充実は個人の工夫でできても、複合的課題を解決し、かつ楽しみを見出すための住まいを実現させることは困難なように思える。

「最近の大学では地域のニーズをきちんと把握して、空き家の活用方法をワークショップで考えるといった実践型教育が各地で行われています。地域資源をうまく利用しながら交流装置をつくることを提案するプレイヤーは、この10年で劇的に増えました。そういったリノベーションプレイヤーを輩出するスクールとして『リリリ・リノベーション』が挙げられます。全国各地の空き家や空き店舗、古アパートなどを題材に、複数人で構成するグループがユニットマスターの指導のもとリノベーションを行うのです。こういった取り組みを地元で探せば、地域に開くデザインを行っているプレイヤーが

地域も活性化していくのだと思いますよ」

例えば、東京都練馬区の「櫻の音 terrace」。かつての日本でよく見られた、軒先が店舗、奥が居住スペースという暮らし方を現代版にアップデートした賃貸アパートだ。1階のオープンテラス部分が店舗空間に、奥が暮らしの空間にした店舗兼住宅になっており、住まいの中に自分自身の店を持てる。2階はより手軽に創作を楽しみたい人向けの住宅で、作品を展示できるディスプレイ窓が設置してある。人によっては

見つかるでしょう」

ただ、あまりに地域の課題を解決することばかりを目的にすると、楽しさの本質を見失う恐れもあるという。最後に、池本氏はこう補足した。

「あくまで自分が楽しいと思えることを提案し、興味のある人に開くという気持が大事だと感じています。他人を楽しませることばかりに目が行き、『地域のためにはオープンカフェが必要』という結論に達しても、コーヒーに何の興味もない人がそれをやったところで、長く続かないでしょう。楽しい住まいづくりの源泉は、自分がワクワクする空間をイメージすることで」

あくまで個人的な「楽しい」住まいを大事にしながらも、他者とそれを共有する。数年前に始まった家開きのブームは、ニューノーマル時代を迎えた後も続いていくだろう。

池本洋一（いけもと・よういち）

株式会社「SUUMO」編集長。SUUMORサーチセンターセンター長。1972年、滋賀県生まれ。1995年上智大学新聞学卒業。同年に株式会社「SUUMO」入社。住宅領域にて編集を4年、営業を7年経験。2006年、首都圏「新築マンション」フリーペーパー地域版の創刊リーダー。2007年「都心に住む」、2008年「住宅情報タウンズ」の編集長を経て現職。メディアを通じ、住まい領域の発信を行う。そのほか、日本版CRCR構想有識者会議、良質住宅ストック形成のための市場環境整備促進事業、ZEHロードマップ検討委員会、賃貸住宅における省CO₂促進モデル事業など国土交通省、経済産業省、環境省、内閣官房などで多数の委員を歴任している。

「IoT住宅」の現在とこれから

「東京大学生産技術研究所教授」
野城智也
Yashiro Tomohari

いまや、IoT (Internet of Things =モノのインターネット) は住空間においても、様々なかたちで浸透しはじめており、その領域も省エネルギーやセキュリティといった分野から、住民ひとりひとりの快適や健康管理、家事サービスなど、まさに生活全般へと拡大している。IoT住宅の現状と将来への展望、求められる条件、産業界全体として取り組むべき課題について、企業横断的な機構「コネクティッドホームアライアンス」の特別顧問も務める第一人者が紹介する。

本稿では、IoTとは「インターネットを介して、モノそれぞれに組み込まれたコンピュータ・システムが互いに結びついて情報を交換し合い、複数のモノを協調的に働かせること」という意味で用いる。1970年代以来、家電など種々の人工物では設置された各種センサーや、小さなコンピュータ・システム(組み込みシステム)により単独で操作・制御する方式が用いられてきた。これに対し、外部のアプリケーション・ソフトウェアからネットワークを介して組み込みシステムに命令を送り、人工物を操作・制御する方式がIoTである。建築・住宅分野では、IoTという用語が普及する以前から、警備システムや、省エネルギーを指した建築設備の運転制御システム(BEMS)...

Building Energy Management System) など、ネットワークを介した機器の操作・制御が行われてきた*1。これらの例は、住宅・建築分野におけるIoTの先駆例といつてよからう。

住まう人の快適さを学んでいく住宅

では、IoTは、住空間のなかで、どのような可能性を拓きはじめているのであるのか? その浸透・展開状況を概観してみよう。

①人工物の遠隔操作・制御

IoTは、ネットワークを介することによって人がその場になくても遠隔で人工物を操作・制御する途を開いている。建築・住宅の警備システムやBEMSはまさに遠隔操作の典型

例であるが、最近では外出時に家庭内の機器を

操作する手段やサービスが急速に普及している。例えば、外出中に家の中の様子を眺める、宅配便に対応する、帰宅前に風呂をわかしたり、空調機を動作させる、といったことができるアプリケーションがユーザーに提供されている。また、在宅時でも、いちいち人工物の前まで移動してスイッチを入れなくても、スマートスピーカーやスマートフォンから機器を操作するサービスも続々生まれている。

②人工物の自動操作・制御

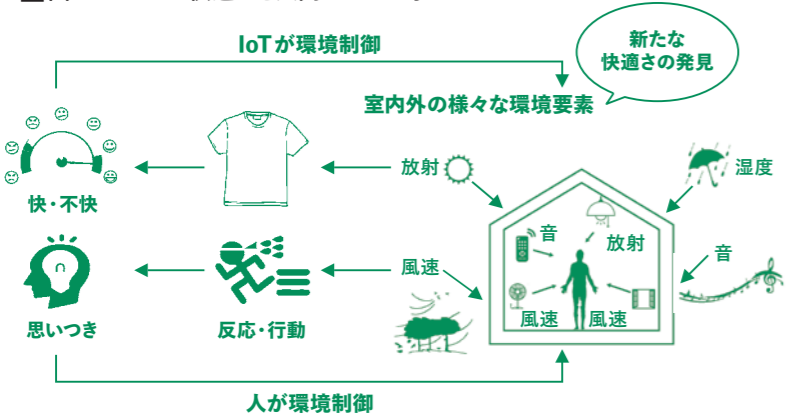
人工物単体に組み込んだシステムによる操作・制御でも、アプリケーションに仕込んだアルゴリズムに従って人工物を自動的に操作・制御することは可能であったが、あくまでその対

象は単一機器に限られていた。これに対してIoTはさらに、

- ・複数の場所に所在する種々のセンサーからのデータの分析による状況認識や、外部からの信号を利用して
- ・複数の人工物を一斉に、もしくは連携的に
- ・動作させる

ことができるという点を画す。具体的には、例えば、外部からの緊急地震速報の信号を利用して、住宅内の機器を一斉に停止させるシステムが試作されている。また、複数のセン

■図1: ふとした快適さを人間と互いに学ぶIoT



室内外の環境と居住者の生理的反応(体温や発汗量)や行動を計測、居住者の真の快適さとその変化を居住者と影響しあひながら学習し、制御目標を状況に応じ設定する。そんなIoTが実現しつつある。

サーから上がってくる情報を分析して、住民が外出したと判断できた場合は、消し忘れ機器の動作を停止したり、開口部の閉鎖・施錠を行うという、「うっかり」による被害を防止するサービスを創出することもできる。また、ガスコンロで調理を開始したら、換気扇の動作や開口部の開閉が自動的に行われるシステムも試作されている。ここでいう状況推定のためのセンサー類は、独立にセンサーを住宅内に置いていく流儀もあれば、相互接続性(後述)が確保されていることを前提に他の機器に組み込まれたセンサーのデータを利用する流儀もある。

③使えば使うほど 使い心地をよくする操作・制御

IoTでは組み込みシステムよりは遙かに大きな容量のデータを分析することができるので、機械学習などのいわゆるAIなどを制約なく活用した人工物の操作・制御を可能にする。実際、空調機は操作履歴をもとに住まい手の温熱環境への嗜好を機械学習し、使えば使うほど空調機の使い心地がよくなるサービスが提供されている。この例をさらに発展させて、室内各所の温湿度や床壁天井・開口部面の表面温度などの環境データや、操作者の操作履歴データをもとに快適域を学習し、操作者・在室者や室内の環境条件・状況に応じた操作・制御をする事例も出てくるであろう(図1)。この例のようにデータが積み上げれば積み上がるほど、学習の精度が上がっていくことによる便益が増していく

「使えば使うほど使い心地がよくなる」ことが実現していく事例はどんどん現れてくると予想される。

④サービスのシナリオに沿った連携制御

IoTを利活用することで、住まい手に対する人的サービスのシナリオに合わせて人工物を連携的に動作させることができる。例えば、米国では、次のようなシナリオによるサービスが試行されたことがある。

- ・冷蔵庫に設置されたカメラ・センサー類などにより、食材の「在庫状況」を把握し、もし、その内容があらかじめ取り結んだ「食材供給サービス」の契約内容に照らし合わせて欠品があると判断された場合は、配達
- の発注信号が送られる
- ・その食材の配達にあたって居住者が不在であれば、認証システムが作動し、食材を冷蔵庫や配達ボックスに受け入れるまでに必要となる解錠などがなされて配達員がアクセスするとともに、そのアクセス状況がカメラなどの監視システムで追跡される

この例では、冷蔵庫は、単なる食品保管庫ではなく、在庫管理と発注を行うサービス端末という新たな役割・意味を担っている。この例そのものが日本社会で受け入れられるかについては、読者諸氏も疑問をお持ちになるであろう。ただ、この例のように、IoTによって住空間のなかにある、ごくありふれた機器に新たな役割・意味が与えられることで、新たなサービス

が創出される可能性は大いに拡がっているといっている。

「ひとまとまりの価値」が持つ重要性

以上のような住空間へのIoTの浸透・展開の向こうに見えてきているのは、これらの可能性を連携させた「合わせ技」がもたらす、新たな価値の創出の可能性である。

例えば、ベッドのマットの下に置かれた脈拍数・呼吸数を測定する非接触型のセンサー及び離床などを推定するための加速度センサーのデータ、室内の温湿度や床・壁・天井の表面温度データ、住まい手が設定した起床時間などのデータをもとに、人工照明機器、空調機、ブラインドなど窓の調光機構を適宜自動制御することによって、住まい手に安眠環境を提供するサービスが供給されるようになることは十分に考えられる。

こうした合わせ技により、言い換えれば、複数の人工物を繋いで擬似的に新たな一体型の人工物として働かせることによって、もたらされる価値を、筆者は「ひとまとまりの価値」と呼んでいる。IoTによって、バラバラに操作・制御されていた人工物同士を繋ぎ、あたかも、それらが一体の人工物であるかのように振る舞わせることにより創出される「ひとまとまりの価値」は、IoTが住空間のなかで実現すべきコトの核心であると思われる。「ひとまとまり

よいワンストップのアプリケーションで自分の意のままに複数の人工物を操作・制御できることが、ひとまとまりの価値にとって大事である。

いま、様々な企業が住生活まわりでのIoTサービスの提供をしている。ただし、一般的に、設備メーカーは自らが製造・販売する機器を作動させるためのアプリケーションを作成提供するが、他社製品も作動するアプリケーションまで提供するわけではない。そこで、個々別々のアプリケーションを束ねて、ユーザーから見えてワンストップのアプリケーションが提供される必要がある。これは技術の問題というより、ワンストップのアプリケーションを提供する担い手がいるのか、あるいは成立するののかという組織立ての問題である。

こうした問題意識にたつて、複数の人工物を束ねて操作・制御できるアプリケーションを提供することが既に展開している。多種多様な機器を製造供給する企業が、少なくとも自社製品についてはワンストップのアプリケーションで動かそうとしている。また、スマートスピーカーなどのユーザー・インタフェースを提供する企業がAPI[*4]を公開して繋がる機器を増やしていくことで、そのユーザー・インタフェースで住空間のなかの機器を包括的に操作・制御できるようにする動きを強めている。また、住宅メーカー、有線テレビ、警備サービスの事業者が住宅全体のIoT機器を一つのアプリケーションで一括に動かそうとする指向を

の価値」という概念を手がかりにすることによって、安眠サービスだけでなく、健康・体調管理サービス（脈拍数・呼吸数のほか、センサー付きトイレによる体重や尿の成分データなど）、見守りサービス（家電の使用頻度、ドアの開閉や床のセンサーによる独居者の行動確認など）など住生活を彩る様々なサービスが多様な人工物の連携的操作・制御によって創出されていくことが期待される。

では、ひとまとまりの価値は、どのような条件が整うと実現するのであろうか？ 筆者は、以下の三つの条件がそろわなければならないと考えている。

- ① 煩わしくないユーザー・インタフェース
- ② ワンストップで使い心地のよいアプリケーション
- ③ 連動させたい人工物がなめらかに繋がる相互接続性

第1の条件であるユーザー・インタフェースについては、いま、様々な試作・探索がなされているといっている。毎年開催される電子機器見本市のCES[*2]でも、実に面白い多様な試みが紹介されている。当面は、スマホが住空間におけるIoTのユーザー・インタフェースとなる未来像を描くことはできる。しかし、それは決して賞味期限の長い未来像にはならないのではあるまいか。というのは、筆者のような高齢者にとって、老眼鏡をかけながら画面を判別しミスタッチせず手指を動かす操作が、煩わ

強めている。

ここで、顕在化しているのが、第3の条件、相互接続性にまつわる問題である。というのは、住宅設備・機器メーカー、ユーザー・インタフェースの供給者、住宅メーカー、有線テレビ事業者、警備サービス事業者が提供するデータや情報を繋ぐ方式（プロトコル）は独自で、それらを相互に接続できる保証がないからである。そこで、いわゆるスマートハウス（これもIoTの初期の事例である）の開発導入が図られた今世紀初頭から、繋ぐ方式を標準化するという努力が続けられてきた。しかし、繋ぐ方式を標準化することは、機器の組み込みシステムのプログラム更新を含め、下手をすると、これまでその事業者が積み上げたモノやコトの大幅な更新をしなければならなくなる可能性もあることから、遅々として進んでこなかった。

そこで、近年では、異なる繋ぐ方式同士の接続ができる仕組みの構築が模索されている。言い換えれば、事業者がいままで積み上げてきたモノ・コトを尊重することを前提に相互接続する方式が求められている。シャープ[*6]、大阪ガス[*7]、セコム[*8]などの企業がそれぞれの独自の繋ぎ方向士を相互に繋ぐ仕組みを導入しようとしているのは、その先端例であるといえる。こうした相互接続の仕組みは、特定企業だけにデータ・情報が流れていって、支配権が集中するような構造・運用になっているとうまくいかない。いまこれらの企業群は、プライバシー保

しくないとはいい難いからである。住空間では、集中力を欠いても煩わしくなく操作・制御できることは大切である。こうした観点から見ると、いわゆるスマートスピーカー、特に、ディスプレイ付きのスマートスピーカーは、未来のユーザー・インタフェースに発展していく可能性を秘めているように思う。加えて、佐藤洋一教授（東京大学大学院情報学環）らの画像解析技術を応用し、目の瞬きや動き、手足の動作で人の意思をIoTに伝える「察しのいい機械」[*3]も未来のユーザー・インタフェースの一翼を担っていると考えられる。

では、第2の条件のワンストップ、第3の条件の相互接続性についてはどうなのか？ これらについては技術的課題だけを見ても答えは見いだせないように思われる。というのは、住空間でIoTを提供していくための組織立てを抜きにして、有効な技術的手立てを創造することはできない、と思われるからである。そこで、住空間でIoTを提供する組織立てにまつわる問題にも焦点をあてながら、第2、第3の条件について考えてみたい。

求められるワンストップと相互接続性

例えば、住宅の機器ごとに別々のIoTのアプリケーションが提供されていたとしたら、ユーザーとしては面倒なこと甚だしく、ひとまとまりの価値の創出にはほど遠い。使い心地の護や、特定企業の支配権が強まってしまわないような構造・運用に配慮しつつ、相互接続の仕組みを構築しようとしているように見える。

相互接続を推進していくために、もう一つ乗り越えなければならぬ壁がある。それは、送信元と宛先の関係が多対多となる、通信ネットワークの分野ではM対N接続と呼ばれる関係がもたらす問題である。上記の日本を代表するリーディングカンパニー同士が相互接続する場合は、メンバー数が限られており、送信元・宛先となる当事者が相対で相互接続の仕組みを作り込んでいくことができる想像される。ただ、ひとまとまりの価値を創出するためには、スタートアップ企業や海外企業が提供する機器も相互接続の環に加えていかなばならぬことも生じると思われる。そうすると、やがて多対多の組み合わせの相互接続を用意しなければならなくなり、それをいちいち当事者が相対で作り込むことが、取引コストという点で現実的なのか、という問題が生じる。

IoT-Hubによって多様な接続が実現

こうした多対多の相互接続で発生すると思われる問題を克服するために、筆者らは、図2に示すように、IoT-Hubという仕組みを提唱し、試作し、その実装をしようとしている。これは、IoT-Hubにさえ繋がるようにしておけば、相互接続できるようにしようという仕組みである。

すなわちM対Nの相互接続ではなく、M対1の相互接続で、多種多様な人工物同士の接続ができるようにしようという仕組みである。

IoT-Hubの仕組みでは、情報・データの繋ぎ方（プロトコル）の相違を乗り越えるため、Driverという接続のためのインタフェースが用意される。例えばパソコンのOSやプリンタの機種が異なってもドライバソフトをインストールすれば接続するが、IoT-HubではDriverを用いることにより、それと同様のアーキテクチャがクラウド空間のなかで動作する。IoT-Hubにより、例えばスマートスピーカーを、API接続している同一クラウド内のデバイス群のみならず、さらに幅広いデバイス群を協動的に動作させるためのインタフェースとして活用できるようになるのだ(図2①④参照)。

IoT-Hubの運営者は、日本の法令上は、電気通信事業者として位置づけられているため、IoT-Hubを通過していくデータ・情報を覗いたりダウンロードすることは禁じられており、IoTユーザーのプライバシーの保護や、企業データの資産の保護を図ることができる。ここでは、IoT-Hub適用の具体例として、これを用いた住宅内のコロナ禍対応への試みを紹介しよう。周知のように、新型コロナウイルスはエアゾール感染もするので、十分な換気をすることが重要である。ただ、換気の状態を五感でとらえることは難しく、室内のCO₂濃度を計測することで換気状況を推察することが試み

すと、足跡データがIoT-Hubを介して紐づけられ、濃厚接触者をより迅速に割り出していく。前述のように電気通信事業者としての守秘義務を負っている者が運営しているIoT-Hubであるからこそ容易にできるプライバシー保護方法である。

IoTを活用したCO₂濃度管理システムも、単位空間内近接管理システムも、それぞれが複数種の人工物の連携による、ひとまとまりの価値を形成する。加えて、IoT-Hubによる同じ情報基盤のうえで、これら二つのシステムを併用すれば、感染防止と万が一の感染拡大防止を一貫して行えるシステムの構築・運用という、さらに大きな、ひとまとまりの価値を形成することができるようになる。

住まいのIoTが目指す技術の民主化

例示した、CO₂濃度可視化システムや、濃厚接触者特定サービスを運用するためのアプリケーション・ソフトウェアの作成には、さほど高度なプログラミング技術が必要ではなく、その開発者・運用者が図2における機器の製造者・供給者である必要もない。言い換えれば、その参入障壁は低く、様々な起業家たちが魅力的なアプリケーション開発に取り組み、切磋琢磨し、アプリケーションが進化していく可能性も秘めているように思われる。近い将来、様々なWeb siteから、お気に入りのアプリケーション

られ始めている。そこで、筆者は様々な研究者・実務者の方々と一緒に、室内のCO₂濃度のデータを可視化し、共有するシステムを普及させようとしている。このシステムは、IoT-EDIを活用して様々な種類のCO₂濃度計で測定したデータを一元的に同一地図情報上で表示する機能を皮切りに、順次、次のような機能を備えていこうとしている。

- ・CO₂濃度が設定した上限値を超えたら、そのことを関係者に通知する
- ・CO₂濃度を参照して、空調機など機械式の換気システムを動作させる

CO₂濃度計の製造者・供給者は様々で、データを繋ぐ方式は個々別々である。加えて、空調機も様々で繋ぐ方式は異なる。こういう多種多様な供給者による人工物同士を相互接続するために、IoT-Hubは役立つわけである。

不幸にして、COVID-19の陽性者が明らかになった場合は、できるだけ早く陽性者と濃厚に接触した可能性のある人々を割り出し、隔離することが感染の拡大防止には有効であるといわれている。国が主導している新型コロナウイルス接触確認アプリCOCOAは、近距離通信を活用して近接距離にいた者を割り出すことを趣旨としている。これに対しIoT-Hubを実装する企業IoT-EX(株)は、COCOAが世に出る前の2020年5月に、濃厚接触者特定サービス「Corona Tracer」を開発し提供してきた*6。こちらは、管理対象となる部屋・単位空間にスマ

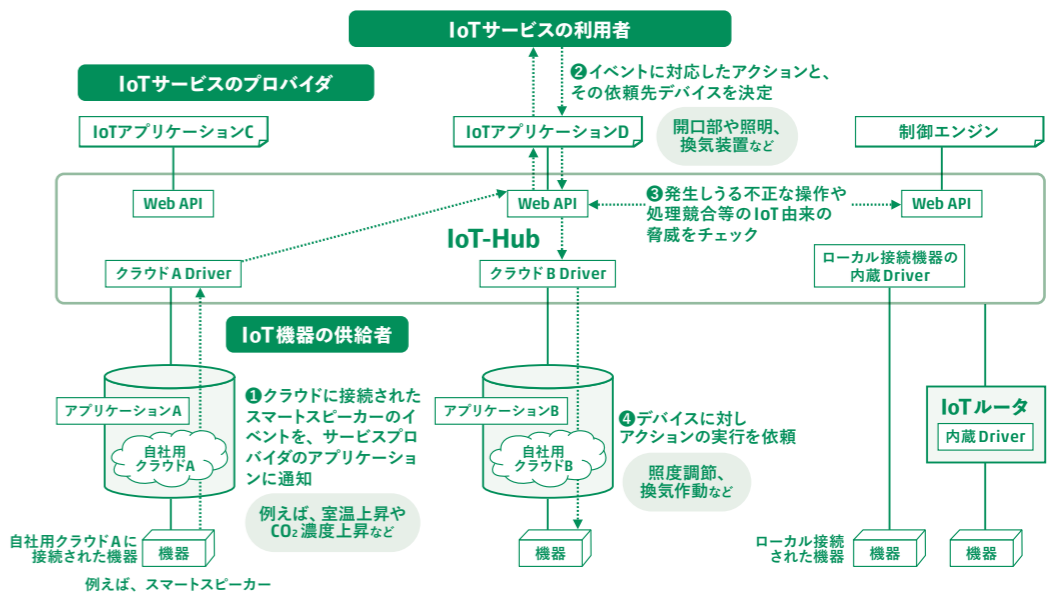
ン・ソフトを住宅にダウンロードして活用する時代がやってくるかもしれない。住空間におけるIoTにおいては、ユーザーやユーザーに近い立場の人が技術革新を牽引する、技術の民主化が進行していく可能性が秘められている、といってもよからう。

いま日本では、比較的大きな企業によりフルセット型のIoTサービスを住空間に提供することが先行しているように見える。このような体制においては、ユーザーにとってIoTはブラックボックス的で、自らがいじれる余地は大きくない。これに対して、北米ではDIYが生活スタイルとしても産業としても定着していることを背景に、住空間中の様々な機器をすこしずつ繋ぎあわせていきつつ、DIY式で住宅内に自らに合ったIoTを組み上げていくことは決して珍しいことではないと仄聞する。IoTがブラックボックスのままでは、住空間における「ひとまとまりの価値」の創出も制約されてしまう。日本においても、IoTでユーザー側が主導できる領域を拡げていくことでIoTの民主化を推進しつつ、ひとまとまりの価値を住空間のなかで持続的に発展的に創出していくことが肝要であるように思われる。

最後に、以下、本稿で扱うことのできなかつた課題を列挙しておきたい。

- ①ひとまとまりの価値が実現しなかった場合の明確な責任分担と円滑な補償の実行
- ②IoTにおけるアプリケーション・ソフトウェア

■ 図2：IoT-Hubによって実現する多対多の相互接続のイメージ



ホ等からの近距離通信の受信体を置き、近接距離にいた人の保持するスマホなどのID番号の足跡が「Beaconデータ収集システム」に残っていくという仕組みである。陽性者が判明した際に限って、安全衛生管理者などにアクセスが限定されているID番号——個人名のデータベース

エアの更新スピードと、機器などのモノが更新するスピードの相違が引き起こしうる世代管理問題

③IoTがらみで収集したデータを住宅の賃貸・売買などで開示し、既存住宅の価値創造に役立てる可能性

これらはいずれも、本稿で取り扱った相互接続の問題と同様、組織立てが密接に絡む問題であり、技術と組織立てのデザインを並行連関させていく必要性を強調し、本稿を閉じたい。

注

- *1 そもそもIoTの概念は、既に1987年に坂村健氏がTRON構想において提唱したHFDs (Highly Functionally Distributed System) 環境に由来する(出典: Sakamura, Ken. "The Ton Project." IEEE Micro 7.2 (1987): 8-14).
- *2 Consumer Technology Association が毎年ラスベガスで開催する*世界最大級の電子機器の見本市 (https://www.ces.tech/international.aspx).
- *3 https://www.designlab.ac/post/transparent-intent
- *4 Application Programming Interface (API) ソフトウェアコンポーネント同士が互いに情報をやりとりするのに使用するインタフェースの仕様。
- *5 企業がそれぞれ持つIoTプラットフォームを連携することで、シームレスなサービス提供が可能になる。例えば、シャープ(株)のアプリケーション「COOHOMIE」から大阪ガス(株)のガス給湯器のお湯はり操作が可能となる。
- *6 接続のための取引コストの小ささが迅速な開発を可能にしたと思われる。詳細はhttps://smatfor-forum.jp/for-val/team/iot-case/main/magazine/mainmaga-039-20200514?mainmaga=を参照。

野城智也(やしろ・ともなり)
 東京大学生産技術研究所教授。1957年生まれ。DLXデザインアカデミー共同ディレクター。建設省建築研究所研究員、武蔵工業大学助教、英国 Reading 大学客員研究員などを経て、2001年より現職。東京大学生産技術研究所所長、東京大学副学長を歴任。サステナブル建築に関する研究分野を開拓するとともに、近年ではIoTに関わる研究開発、イノベーション・マネジメントに関する研究にも取り組む。著書に『未来の住まい——住宅研究のフロンティアはどこにあるのか』(共著、柏書房)などがある。

新しい住まいのかたちとは何か ——持続可能性と中間領域から考える

少子高齢化のさらなる進展、家族という概念の変化、住まいと地域の関係、そしてシェア居住やサブスクリプション、IoTに代表される技術革新など、住宅とそれを取り巻く環境がかつてなく大きく変わりつつあるなかで、これからの住まいが進むべき方向、指針をどう考えていけばいいのか。大阪ガスによる実験集合住宅NEXT21で指導的立場にある高田光雄氏を迎え、今あらためて、住まうことの基本と未来像をさまざまな角度から再定義する。

入澤誠＝構成
宮村政徳＝撮影

対談

高田光雄

「京都美術工芸大学教授」

加茂みどり

「大阪ガス㈱ エネルギー文化研究所研究員」



自然との関係を意識することで豊かな住みごたえを味わう

加茂 本日は、先生にも長年ご指導をいただいている、ここNEXT21「**エ**」で、これからの住まいにとってどんな点が大切になっていくの

とすると、それとは違う非手段的な価値が住まいにはあって、私はこれを「住みごたえ」と呼んできました。人が住まいに関わるなかで獲得する真の豊かさ——特に自然との関係、自分にとって心地いい状態を、受動的ではなく能動的に探し求めないとそう簡単には得られない。そのためにも、日常の暮らしのなかでもっと自然を意識できる環境がないといけないし、風通しなどは基本中の基本という気がします。

加茂 生まれてからずっとマンション暮らしだったうちの息子は、風を通すという発想すらまったくなかったんですけれど、リフォームして風を通せるようにしたら、この窓を開けて、こっちは閉めてと、その時々で一番心地いい状況を自らつくるようになりました。そんな変化を見ていると、家にそういう操作性があるということが、居住者の能動的な気持ちの後押しするとか、住まいの力でサポートできることのひとつなのかな、とあらためて感じますね。

高田 日本の場合、季節感というのがしっかりとある。これは自然と付き合うときに、とても豊かなベースになると思います。にもかかわらず、一年中一定の温度に保つということが目標になっていく場合がある。もちろん、高齢者施設や病院などでは、そうせざるを得ない面もありますが、一般の住宅の場合、私は夏はちょっと暑いくらいがいいし、冬はちょっと寒くあるべきだと思っているんです。なにも我慢しろというのではない。季節感が感じられない家での

か、幅広くお聞かせいただきたいと思っています。

高田 NEXT21では、少々使い古された言葉かもしれませんが、住まいにおける「持続可能性(sustainability)」についてずっと考えてきました。第二次世界大戦以降の日本の住まいは、常に効率を重視して研究も実践も行われてきま

暮らしは、豊かな暮らしだとは思えないんですね。たとえば、冬は鍋料理、夏は素麺という食文化や、季節に合わせた衣替えなどの衣文化もそこに生まれてくるわけで、そうした文化を享受できる暮らしを簡単に捨てることには疑問を感じます。

加茂 四季を感じて暮らすということは、すごく日本的ですね。そうした面では、東京大学の野城智也先生が研究されている最新のIoT住宅(32頁参照)でも「ふと感じる快適さ」がテーマになっており、興味深く感じました。

高田 たとえば京町家のように、都市のなかの住宅では風通しを最も重視してきました。自然との関係を意識するなかで、家のウチとソトにも多様な結びつきが生まれるのではないのでしょうか。

家族そして社会とのつながりが多様に変化する時代の住まい方

高田 日本の住まいでは古来、ソトでもなくウチでもない、「中間的」な領域や空間がさまざまに発達してきました。具体的には、縁側とか玄関土間などの半戸外空間を挟んでウチとソトがあり、そこに建具が開閉自在に取り付けられている。そういう構造は自然と関わる面だけでなく、別な面でもメリットが大きいです。

加茂 社会的持続可能性もそのひとつですね。**高田** たとえば、人の暮らしが大きく変わり、家族構成や住まい方も変化してきているなか、

した。実際には70年代の半ばぐらいから状況が大きく変わったのに、住まいづくりはなかなかそれについていけなかった。コロナ禍で露呈した課題も踏まえて、単に効率というのではない、真に豊かな住生活を支える住まいについても一度きちんと考える必要性を強く感じます。

加茂 持続可能性ということでは、先生は以前から「環境的」「社会的」そして「文化的」という3つの点から検討してこられたわけですが、そもそも持続可能性自体は環境から始まっていると考えてよろしいでしょうか？

高田 そうですね。ただ、住宅の分野で環境というと、どうしても、どれだけエネルギーを上手に使ったか、健康にとってどれくらいプラスになるのかなど、効率面の話が中心になります。しかしそれだけではなく、人が自然と関わり、真に豊かな暮らしを育むということも、住まいにおける環境的な持続可能性を考えるときには大事だと思っています。

加茂 私はずっと京都の町家で暮らしてきましたが、外の音もよく聞こえるし、風鈴もあって風も通るような暮らしだったのが、マンションに引っ越すと音も全然聞こえず、外で雨が降っているかどうかもわかりません。その点で、自然と暮らしている感覚とは程遠い状態が続いてきたのを痛感します。

高田 住宅に関する性能の研究も進み、数値で測れる指標も増えていますが、そういう快適性のための手段的な価値を「住みごこち」と呼ぶ

単独世帯の急激な増加は統計的に明らかかわけです。今の大都市で最もポピュラーな家族構成はひとり暮らし、ということですね。ならば、住まいは全部ワンルームマンションでいいかという、決してそうではないだろう、と。

加茂 今回取材で伺った京都下鴨修学館(8頁参照)も、多くのひとり暮らしの方がシェア居住しているんですが、人間関係の面ですごく豊かに住まわれていたのが印象的でした。

高田 ひとり暮らしだから、すべてひとりで生活すると考えるのは誤りで、そこにはもっと多様な選択肢があるべきだと思います。私はそれを、生活の一部を共同化する住まい方と呼んでいます。これからの単独世帯ではバラバラに個人化した生活をつなぎとめる——たとえば、食事をするときに誰かとテーブルを囲むとか、団欒(だんらん)は誰かと一緒の空間で、というように選択的に結び直すことも考えていくべきで、そこに中間領域の役割もあるように思います。

加茂 少子高齢化が急激に進む日本では、特にそういう視点が必要になりますね。

高田 人の一生が長くなると、結果的に個人が自分のライフコースを選択せざるを得なくなる。それが混ざり合った社会では、必然的に生活単位の個人化が進むわけで、それをサポートする住まいとはどんなかたちかを考える際、ワンルームを大量につくるやり方では、豊かな暮らしを支える基盤にはならないと思います。

加茂 必要なのは、個人と個人のいろいろな関

係を、選択的に生み出せる住まいということでしょうか。ただ、そうした場合も常につながっているというわけにいかず、閉じたままでもまづいということ、簡単ではないですね。

高田 先ほど出たシェアハウスの場合なども、住まい手だけではなかなか成り立ちませんし、ほとんどの場合、サポートをしている外部のスタッフがいいます。ほかにも高齢者のヘルパーとか、子育て家庭のためのベビーシッターとか、関係は住まいの内外を問わず広がっていき、個人の自立との両立となると、従来あまり経験がありません。当然、そこにはプライバシーをはじめいろいろな課題が出てくるはずで、その解決にあたってウチとソトの間にある中間領域が果たす役割は少なくないと思います。

加茂 一方で、コロナ禍で一気に進んだ在宅勤務など、仕事面の多様化も関係してきます。

高田 高齢化という意味でも、リタイア後に自宅をオフィスにするなど、プライベートな住まいをパブリックな空間に切り替える必要が出てきている。その点、個人化が進んでいる一方で、それぞれの関係は複雑化しており、社会的な持続可能性の意味からも、中間領域を含めた住まいの多様性は広がっていくべきです。

加茂 人と人とのつながりでは、下鴨修学館でも、一人ひとりが周囲とどういう距離感、関係性でいたいか、人との付き合いをどのように考えるのかなど、個々人がしっかりと見つけ、暮らしに向き合っておられました。それと同じ

で、家族、たとえば夫婦という関係があれば考えなくてよかった人とのつながり方を、誰もが考えていく必要がある。住まいについても、そうしたプロセスがあるはずで、ソフトとハードの両方から捉えていかなければいけませんね。

開く、閉じる、つながる、離れる 住まいに求められる柔軟な操作性

高田 社会的な環境変化に応じて、周囲との関係もつなぎ替えをしていくべきですし、個人がそれをできるようにしていなければいけない。一方、家の方がそれを拘束しているというのが今までの住まいのかたちであって、それをどう変えるかが課題です。シェアハウスのあり方を見ても、住宅計画の領域では、すでに住戸という概念がなくなっているように思います。そもそも「世帯」と「住宅」の関係はもう――。

加茂 まったく一対一ではない。

高田 ひとつの住まいをひとつの世帯全員で使っているわけでもなく、各人バラバラの多拠点居住も当たり前を境目を設定するのは非常に難しくなっています。しかもそれが固定的ではなく常に流動的で、住宅には一層強いフレキシビリティが求められている。そうした複雑な関係と変化に対して、住まい手が住まいのかたちを自由に操作できるようにしてほしい。それには、住まいを構成する空間が大きくなったり小さくなったり、くっついたり離れたりする工夫が必要で、私は「入れ子構造」と呼んでいる

のですが、複数の空間をどこまで開くか閉じるか、個人の側から操作できるようになっていないかならありません。

加茂 一方でソフトの面でも、下鴨修学館のCJFさんのマネジャーの役割とか、ADDRESSさん（20頁参照）の家守の役割とか、あとはnonieの入江智子さん（14頁参照）も人々との関係を整えていくというか、円滑にうまくいくような働きをされていて、それが住まいにおけるひとつのサービスになっているという気がします。

高田 歴史的には、たとえば大家さんと店子との関係などもそうだったわけですが、これからは住まい手自身がそういう部分をもっと意識するべきです。当然、ハードとしての住まいにおける中間領域についても、個人と社会あるいは個人と個人との関係を調整するため、これをどう活用していくか考えなければなりません。

加茂 サービスという意味では、医療や看取りの問題も無視できません。ひとり暮らしの人が亡くなるまでちゃんと自立して住める「終の棲家」というのが今はほとんど検討されていない。そのためにも医療分野や現場の専門家の方との連携がすごく重要になってきますし、さっきのフレキシビリティのある入れ子構造の住宅をどこまで開くかコントロールできるというのは、外のサービスをどんなふうに入れるかという点でも、すごく有効ですね。

高田 文化活動家のアサダワタルさんと

「住み開き」の概念を提唱されましたが、同じような意味で「まちの縁側」的にプライベートな部分を開放する――たとえば、住まいの中間領域をもう少し簡単に開けたり閉めたりできる

といいと思いますし、ワンルールの閉じた個人空間とパブリックな空間だけではない、新しいかたちを見つけていくことも必要ですね。

加茂 中間領域については、先生がしばしばおっしゃるように自分も出て行きやすいというメリットもあります。マンションでも広めの玄関土間があると、ドアを開ける前にちょっとした身づくろいがしやすいとか、高齢者が足元の不安を感じずに外出しやすいというのも、人々の関係を積極的につくるうえで意義が大きいと思います。

高田 伝統的な路地のある長屋街区では、路地空間が子どもの遊び場や身近な交流の場として活用されている。マンションなどでは効率第一の発想で廊下や階段は通行のためにしか使えません。路地は決して広くないんですが、それぞれの家とちよどい開き方につながっていて、住人相互の関係が作りやすくなっている。そうした、まちの伝統のようなものを大切に、積層化するという意味でも中間領域の活用が進んでほしいですね。

和室文化の復興と継承から見える 住まい空間の新たな可能性とは

加茂 中間領域に関しては、縁側空間とか土間

空間とか、日本の居住文化ともすごく関わっているところがありますね。文化的な持続可能性についても、お話をいただけますか。

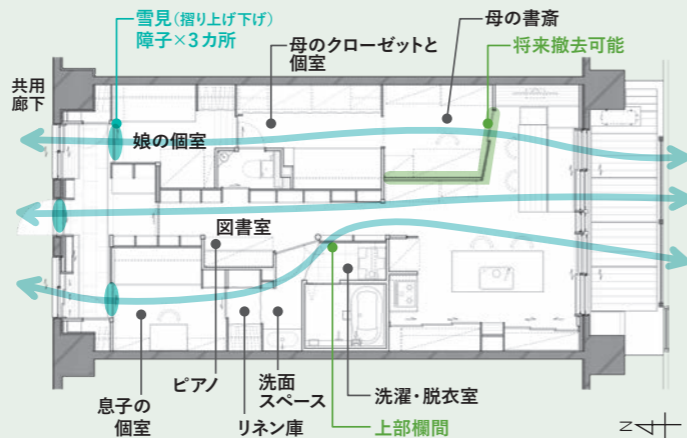
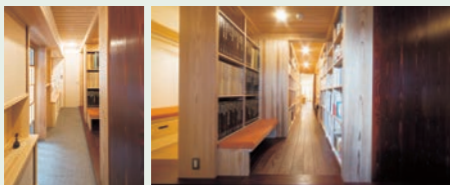
高田 持続可能性の議論というとSDGsがすぐに思い浮かびますが、じつはあのかなには文化的な側面があまり含まれていません。ゴールやターゲットの拡張も議論されています。実際、私たちの住まいを考えると、文化的側面は大きなウエイトを占めているはずで、グローバルゼーションで世界中似たような住まいや住生活が広がるのが、本当に豊かな暮らしにつながると思えない。場所ごとの気候風土に合わせた文化的条件、地域ごとの歴史、住まい方の蓄積を生かした住まいを未来に向けて考えていくべきではないでしょうか。

加茂 日本の場合、いわゆる和の暮らしというのがどんどんなくなった時期がありますが、最近若人が再評価して、町家をDIYでリノベーションしたり、集合住宅に土間をつくらせたり、風通しを考えた住宅にしたりというのが、かなり増えているような気がします。

高田 建築学会でも、和室の研究会が『和室学』（2020年）という本を出版するなど、和の住まいに関心が高まっています。たとえば引き戸――これは閉めた状態が定位置の開き戸と違い、必要なところで固定できるため、先ほどのウチとソトを開けたり閉めたりする調節に無限の選択肢がある。また、開き戸のような枠がなく、引き戸が構造体に直にはめ込まれている

中京・風の舎（京都市中京区）

設計：三澤文子（Ms建築設計）+加茂みどり（大阪ガス）
マンションをリフォームし、間口幅の玄関土間（写真左）が中間領域として各個室の自由なアクセスを可能に。中央廊下の「図書室」（同右）を中心に3本の風の道を設け、日本の気候風土に合った和の住空間を集合住宅の一住戸に実現した。第35回住まいのリフォームコンクール国土交通大臣賞受賞。 撮影／畑拓



「*3」。日本の住まいが梁と柱できているという文化が前提になっているんですね。

加茂 引き戸、スライドイングドアというのは自在な間仕切りになって、開いた状態で複数の部屋をひとつに使ったり、逆に見せたくない部分を自然に隠すのにも便利です。ライフステージの面でも、子育ての時期には隣の部屋に寝かせておいて、戸を少し開けておけば物音や気配を感じながら仕事や家事が安心してできるなど、閉め切ってしまう壁とドアの文化にはない長所がたくさんありますね。

高田 最近のマンションでは和室タイプがほとんどなくなり、そうした長所、さらにはウチとソトをつなぐという発想すらも失われてしまいました。そんななか、若い層を中心に和の住まいが見直されているのは、持続可能性という視点からも素晴らしいことだと思います。こうした生活文化の継承は、たとえば建物の外観などではなく、建具や畳のメンテナンスといった営みの継承にも結びついている。

加茂 建具屋さん、畳屋さん、減っていますね。
高田 そうなんです。逆に、住まいの文化の継承のために、職人さんや技能の継承を応援するというのも大切です。いざ和室をつくらうというとき、つくる人や技術がなくなってしまうとどうしようもなくなります。
加茂 サポートする人たちも大切ですし、そもそも住まい手側の文化継承というか、わが子にこれを引き継ぐ姿勢が必要ですね。そういう私

も、自分は京都の町家で生まれ育ったにもかかわらず、子どもはマンションで育ててきた。生活文化や技術を次世代に残すためにも「住教育」の大切さを痛感します。

高田 おっしゃるとおりです。
加茂 小学校の家庭科に被服や栄養、つまり衣と食はあるのに、住み方を十分に教えていない地方による違いがあるにしろ、たとえば京都の学校では町家の暮らしについては最低限、伝えるべきではないかと思っています。
高田 大阪ガスさんは、NEXT21という素晴らしい実験の場をおもちですので、教育活動の支援にも役立ててもらえるといいですね。

NEXT21「自在の家」がめざす 環境的・社会的・文化的持続可能性

加茂 家族の拡大と縮小にせよ、いろいろな人のつながりにせよ、既存の住まいをカスタマイズしたり、リフォームするというのは重要で、Daggaグループでも本格的にそうしたビジネスを展開しつつある「*4」ですが、それにはやはり現場での検証や居住実験が参考になります。NEXT21はそうした面でも一定の役割を果たしており、先生にも広くご指導いただいた最新改修の「自在の家」がまさに今日のお話に通じるのかな、と。

高田 環境的、社会的な持続可能性という点で、これ以上はない実験の場になりますね。
加茂 5つの室空間から成り、それらを自由に

分離したり結合したりして、その時々に必要な住まいを構成。中を貫いた中間領域となるウチドマが、室空間の使い方によってパブリックからプライベートまで空間の質を変化させ、空間をやわらかく隔てたりつなげたりするのがコンセプトです。家族構成の変化をはじめ、家で働くとか、人が集まるといった多様なアクティビティの場になり得る空間になっています。

高田 家族に気を使わず友達との交流を楽しむなど、個人化への対応も柔軟にできて、育児や療養・介護の場としても汎用性が高い。先ほどお話しした開くか閉じるかという点では、開きつつ閉じる、閉じつつ開くということが可能で、個人の空間のプロテクトと交流という一見矛盾する目的を同時に実現しているのが画期的です。実施設計では数々の苦労が見られます。5つの空間は、横並びだけではなく重層的に組織化されることも想定してウチドマが設計されている。閉じるときはぴったりと閉じ、開くときは建具の存在そのものが消える。

加茂 建具には気を使われていますね。スリット式でちょっと開けると中のポリカーボネイトの板が動き、視線は適度にさえぎりつつ風を通したり、回転式の欄間も使って、風の流れや温度を自然に調節できるよう工夫されています。
高田 一見閉めているようで、どこか開いている……建具は本来、閉めた状態でも風を通すことができると考えて、通気と心理的な安心感を両立させている。開けると存在が消える引き戸

のディテールにも注目したい。こうした建具の開発が、さらに進むといいですね。

加茂 居住というのは驚くほど個人の固定観念が強く、自分の唯一の住まい経験に基づいて、全然違う住まい方を誰もが一般的だと考えている。これまで四半世紀、今の第4フェーズまでNEXT21での実験を見てくるなかで、そんなことを実感したんですが、そういう多様性に対応するにも、フレキシビリティ、中間領域の活用、ユニットの分離結合というコンセプトは有効だと思うんです。

高田 それだけに、これまでにないウチドマのある生活にあたっては、居住者の方にぜひご自分の固定観念から抜け出し、意識的にこれを活用して風の通る気持ちよさや、自在な空間のあり方を体験してほしい。同時に、これからの展望という点では、和の住文化について考える機会を少しでも多くもってほしいですね。

加茂 確かに、和の住文化と注目を集めても、結局、なんだかわからないというのでは、イメージだけに終わってしまう恐れがあります。

高田 じつは、30年前、NEXT21の廊下部分にあたる立体街路を設計した際は、すぐ近くの戦前長屋街区の特性を調べ、それを積層化することを試みました。未来型住宅のNEXT21にも戦前の長屋の文化が息づいているというのは象徴的です。そういう部分も含め、今度の改修で入居される皆さんには、生活文化の継承・発展にも積極的に取り組んでいただければ幸いです。

す。

加茂 このNEXT21が、これからの住まいや住まい方を発信する役割を果たしていけるなら素晴らしいと思います。本日はありがとうございました。

注

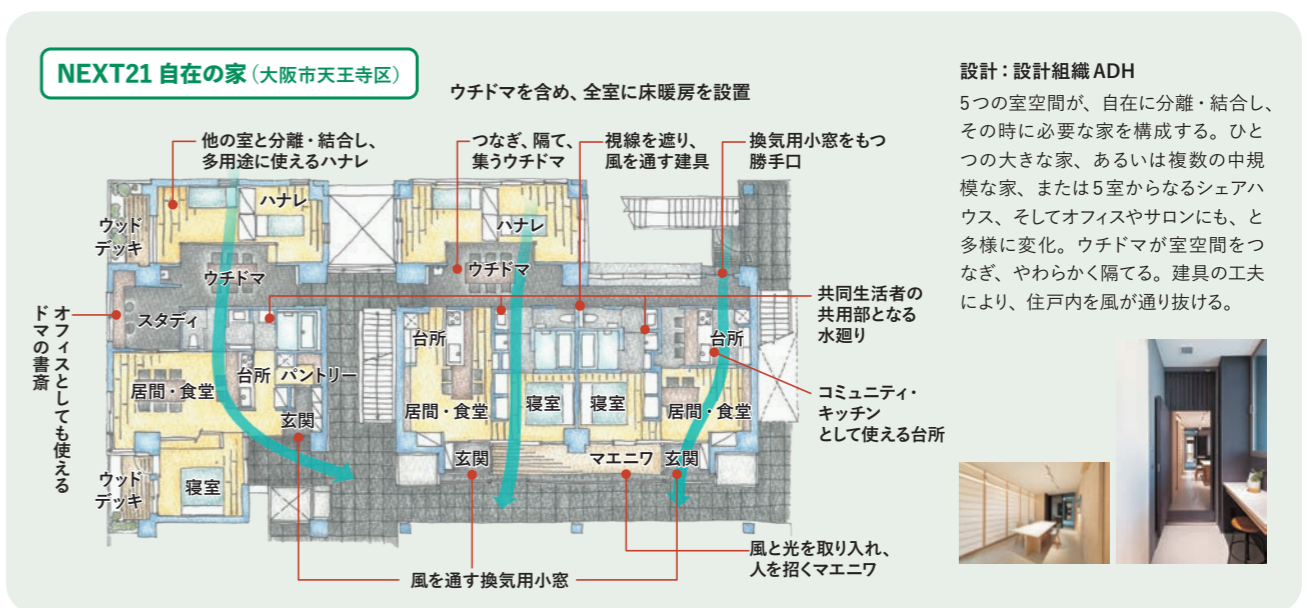
- *1 大阪市天王寺区にある大阪ガスの実験集合住宅。地上6階、地下1階で、3階以上に18戸の住戸がある。1993年の竣工以来、定期的な改修を行いつつ、実際の居住を通じたさまざまな提案・実験・検証を行う。
<https://www.osakagas.co.jp/company/efforts/nex21/>
- *2 1979年生まれ。住居や個人事務所といったプライベート空間の一部を、本来の機能や役割を保ちつつ限定的に開放し、セミパブリック化する新しいコミュニケーション「住み開き」の提唱者。
- *3 壁構造のドアにはそれを組み込む枠があり、多くの国では引き戸の場合も枠の中でスライディングするところ。日本では襖や障子などが直に柱と梁の間にはめ込まれ、自由に取外すことも可能な仕組みとなっている。
- *4 グローバルベイス㈱によるリフォーム事業。㈱ユナイテッドアローズや㈱ダルトン等とのコラボレーションによる付加価値向上などのカスタマイズメニューをそろえる。今秋より関西に事業展開予定。

高田光雄 (たか・みつお)

京都美術工芸大学教授、京都大学名誉教授。1951年生まれ。京都大学工学部建築学科卒業。同大学大学院・工学研究科教授を経て2017年から現職。著書に『木の住まい』『少子高齢時代の都市住宅』など。作品に「実験集合住宅NEXT21」「平成の京町家 東山八坂通」などがある。日本建築学会賞、都市住宅学会賞、日本建築士会連合会賞など受賞多数。

加茂みどり (かも・みどり)

大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所研究員。京都大学博士(工学)。岡山県立大学・大阪商業大学非常勤講師。神戸市すまい審議会委員、堺市住宅まちづくり審議会委員、国立研究開発法人建築研究所研究評価委員会住宅・都市分科会委員など。集合住宅の住戸リフォーム設計「中京・風の舎」で第35回住まいのリフォームコンクール国土交通大臣賞受賞。



設計：設計組織 ADH
5つの室空間が、自在に分離・結合し、その時に必要な家を構成する。ひとつの大きな家、あるいは複数の中規模な家、または5室からなるシェアハウス、そしてオフィスやサロンにも、と多様に変化。ウチドマが室空間をつなぎ、やわらかく隔てる。建具の工夫により、住戸内を風が通り抜ける。



未来を見据え、 新しい住まいのかたちを 考えるための10冊

生活様式や社会的価値観が大きく変化するなか、
これからはどのような住まいが求められていくのでしょうか。
今号で紹介した事例の理解を深める10冊を選びました。



6 『シェアの思想／または愛と制度と空間の関係』

建築分野における「シェア」は、単なる空間の有効利用が目的ではない。背景にある近代社会制度、政治、経済、哲学、家族などの文脈を読み取り、社会的・思想的流れに位置付け直すことで、「シェア」の実像と可能性について考察を重ねる。建築家や哲学者15人の考え方や、実践された作品などにも触れられる貴重な一冊。

門脇耕三=編集協力・著 西沢大良、古澤大輔、
國分功一郎、西田亮介、千葉雅也ほか=著
LIXIL出版/2015年



7 『サブスクリプション ——「顧客の成功」が収益を生む新時代のビジネスモデル』

サブスクリプション型ビジネスモデルについて明かし、全米でベストセラーになった一冊。サブスクとは単なる定額制ではなく、顧客のニーズに合わせて常に改善が求められる「永遠のベータ版」サービスであり、製品中心から顧客中心へと組織の発想が移行することこそが本質であると説く。

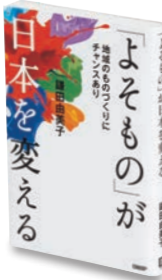
ティエン・ツォ、ゲイブ・ワイザート=著
桑野順一郎=監訳 御立英史=訳
ダイヤモンド社/2018年



8 『「よそもの」が日本を変える』

コロナ禍により、人々の働き方やマインドは激変した。今は、昔ながらのものづくりや文化に恵まれた「地域」にこそ可能性があり、それを自覚めさせるのが「よそもの」存在だという。農業や観光などの地域ビジネスに都心のビジネスパーソンが参入し新たな価値を生んだ事例や、著者自身の経験を紹介しつつ、未来に残るシン・チホウ(新・地方)創出の道筋を考える。

鎌田由美子=著
日経BP/2021年



9 『町の未来をこの手でつくる ——紫波町オガールプロジェクト』

morinekiの入江氏が先導例として目指した岩手県紫波町のオガール。その歩みを関係者への丹念な取材で追う本書は、健全な資金調達と長射程のランドデザイン、ライフスタイルを核にした集客力など、公民連携による真のにぎわい創出への途を具体的に指し示す。高齢化と人口減、財政難に悩む地域の未来を考えるうえで必読の一冊。

猪谷千香=著
幻冬舎/2016年



10 『住み開き 増補版 ——もう一つのコミュニティづくり』

自宅の一部を開放し、博物館や劇場、ギャラリーや子育てサロンなどに活用する「住み開き」の提唱者・アサダワタル氏の単行本(2012年発売)に増補を加えた文庫版。紹介されている40事例のなかには、若者だけでなくシニア層による取り組みも見られ、当時の空気感や実践者たちのフィロソフィーを感じ取ることができる。

アサダワタル=著
ちくま文庫/2020年



1 『和室学 ——世界で日本にしかない空間』

寸法の規格化と自由度の高い建具で間取りを変えやすく、素材の特性と建具の工夫で温度や通風の調節に長け、木材を中心に伝統技術の応用もきく。和室は社会的・文化的・環境的持続可能性の面で近年再評価される。和室の定義や歴史、文化的影響、生活との関係まで、多様に論じた本書は懐古趣味とは無縁の知的興奮に満ちている。

松村秀一・服部岑生=編
平凡社/2020年



2 『民間主導・行政支援の 公民連携の教科書』

行政主導による第三セクター方式のまちづくりが挫折するなか、近年注目を集めているのがアメリカ生まれの先進的な公民連携プロジェクト。紫波町オガールをはじめ、多くの成功例を支えた“仕掛け人”清水義次氏が、公民連携の3つのモデルを紹介する本書は、基本の論文や事例研究も充実し、実践への貴重なヒントに満ちている。

清水義次・岡崎正信・泉英明・馬場正尊=著
日経BP社/2019年



3 『これからのIoTビジネス』

技術的シーズは完成しつつも、一般レベルへの浸透は道半ばの感もあるIoT。特に住宅関連での統合メリットが大きいとされるこの分野に関し、本書の内容は原理と応用、実際の展開まで、図解を多用して明快にまとめる。IoTによるつながりが、産業や生活に何をもちたらし、社会をどう変えていくかが一望できる、充実の入門書だ。

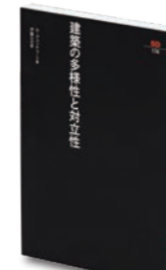
IoT産業技術研究会=著
デリバリーコンサルティング=監修
エムディエヌコーポレーション/2018年



4 『建築の多様性と対立性』

今号で岸氏が取り上げた『建築の複合と対立』の改訂版。著者のヴェンチャーリはアメリカの建築家で、形態の単純性や幾何学的な純粋性を表現することを重視した近代建築に、いち早く異を唱えた人物。中世西欧の歴史的な建築に見られる多様さと、建築や都市デザインに内在する対立性には有用性を見出した。二者択一ではなく両者共存という考え方は、現代の住まいにも参考になる。

R・ヴェンチャーリ=著 伊藤公文=訳
鹿島出版会/1982年

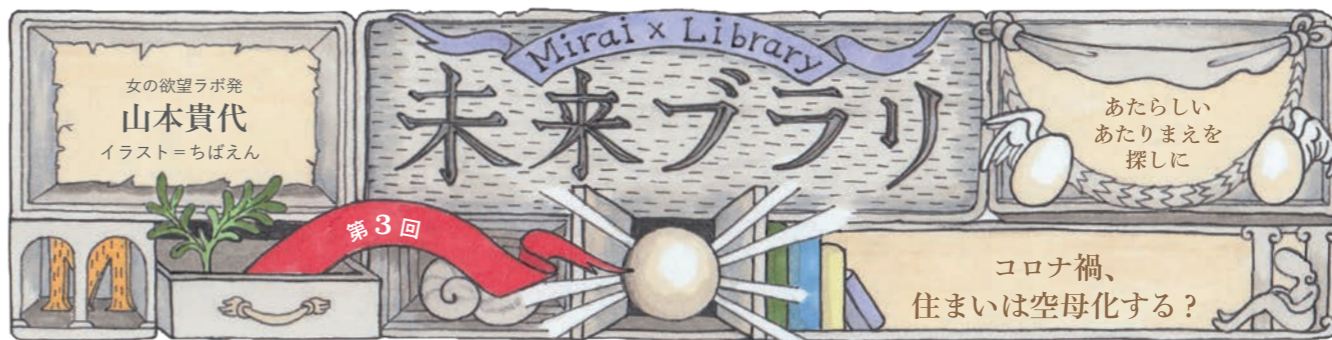


5 『シェアライフ ——新しい社会の新しい生き方』

内閣官房シェアリングエコノミー伝道師の肩書きをもつ著者が、「シェア」=分かち合うことという思想の本質を見出し、将来に向けた新しい生き方や社会のあり方を提案していく。資本主義社会がもたらしたこれまでの経済的価値基準とは異なる「つながり資産」という考え方と、自らも実践するシェアライフの事例類には学ぶ部分も多い。

石山アンジュ=著
クロスメディア・パブリッシング/2019年





日常はコロナの蔓延で一変。急ぎ足でやってきた少し先の未来を、世の中の消費を牽引する女性の視点から解説していきます。現場もがらり巡って、新たな気づきを発見するコーナーです。

在宅勤務で生活満足度アップ

在宅勤務が日常になった今、3回目は「住まいにおける欲望と変化」についてあれこれ考察していこうと思います。今回本音を聞いたのは、会社勤務から在宅勤務へなど、自身か家族に働き方の変化があった20代〜70代の女子104人です。果たしてどんな変化が起きているのか、暮らしを覗いていきましょう。



「昼間のリビングは天国」という声は今昔? 家族が日中在宅するようになった、「居場所がなくなった」という主婦も多いと聞きます。アンケートでは「自分の部屋はないけれどスペースを作った」という人は約3割いました。そんな中の「住まいの満足度」を聞くと、「満足」という人の割合は約41%と意外と高く、「不満」(約34%)を上回りました。通勤がなくなり時間にゆとりができ、家で

過ごす時間が増えたことで満足度はアップ、「家族をそばで見守れる」「会話が增えた」「家をキレイに、合理的に改善できた」ことが理由の多くに見られました。一方「不満」を作っている要素は、「仕事に子どもが邪魔してきて集中できない」「狭い自宅がますます狭い」「ひとりのスペース、時間が欲しい」などで、ストレスが溜まった人もいるようです。

コロナ禍で買った「仕事のモノ」と「趣味のモノ」

では、同じスペースの中でより快適に暮らすため、皆住まいにどんな工夫をしているのでしょうか。「思い切った家具を全て捨て、在宅勤務用家具をレンタルして、必要最低限の家具だけの心地よい空間に変えることに成功」(50代未婚)はひとり暮らしの成せる技でしょうか。在宅勤務が増えて購入した「仕事関係のモノ」は、1位…イヤホン、2位…パソコン・タブレット、3位…Wi-Fiなどの通信環境。「リラックスや趣味関係のモノ」は、1位…ネットフリックスなどの動画配信サービス、2位…室内運動のためのグッズ、3位…入浴充実グッズでした。場所をとるモノの購入にはなかなか踏み切れないのが現状ですが、イヤホンでひとり空間を作ったり、パーソナル背景を駆使したり、通信環境の改善をしたりと心地よく暮らす方法を探っているようです。



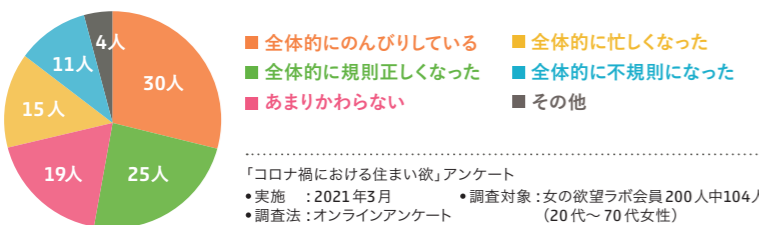
また、家で過ごす時間が増えて「新しく始めたこと」を聞くと、「犬を飼って散歩が日課に」「部屋を花で飾るように」「ハーブを育て始めた」「アロマを焚く」「小さなワイヤレスラーターを買って晩酌が増えた」などが挙がりました。生活の余裕と豊かさを感じます。「やめたこと」は「家事代行サービス」「荷物の再配達」

亜女子ブラリ

昨年11月まではコロナ感染者は少数だったモンゴルですが、「現在は感染者が急増し大変なことになっています」とゾラさん。牧草地に住む遊牧民たちは悠々ですが、すでに60万人の国民はワクチンの1回目を打ったとはいえウランバートルは医療崩壊、交通渋滞が名物になっている街中も、ロックダウンで閑散としているとか。「在宅勤務になって変わったことは、家の中で毎日運動するようになりました。母はパンを焼いたり、花を植えるなど新しい趣味ができて楽しそう」。人材派遣会社で日本語を教えたゾラさんも、コロナの影響でオンライン教師に転身。配達サービスやショッピングなどオンラインビジネスはとも流行っているようです。



コロナ禍でのあなたの生活時間の変化は?



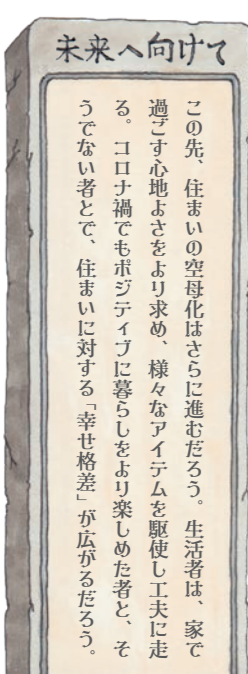
「子どもの学童保育、シッター」など。これらが物語るように、現在の生活時間は、「のんびりしている」という人が一番で、次は「規則正しくなった」でした。ライフスタイルがプラスに転じた人は多そうです。

「お風呂やキッチンなど住宅設備の充実」より「ネット環境のよい家に住みたい」という願望が上昇していました。納得。間取りについての考えの変化を聞けば、「一軒家に憧れる」「あと一部屋欲しい」「防音壁にしたい」「仕事場とを区切る渡り廊下が欲しい」など欲は尽きませんが、「家族に音を出さないで知らせるON AIRライトが欲しい」

「コンセントの位置を変えたい」「一番リラックスできる風呂場とトイレをリフォームしたい」といった意見は実現可能な範囲かもしれませんが、理想の住まいに関しては、「気持ちの切り替えがなにより大切。それができる空間があることが理想」という意見が多く、リアルな空間が無理でも、気持ちを切り替える工夫をしているように思いました。逆に「オンオフを曖昧にして、子どもにも仕事の話や相談をするなど大人の世界を子どもにオープンにするのもいいかなと思う」という意見も興味深いです。「より住環境やサービスを充実させたい」と考えるようになった」という意見が大半でした。

多機能になった住まいの行方

「快適な仕事場として」「おいしい食堂として」「身近なジムとして」「癒やし・娯楽の空間として」など、住まいの役割は、コロナを通してより多機能になりました。海や山など自然の多い場所での



誌面に掲載できなかった調査内容も、CELホームページで紹介予定 (<https://www.og-cel.jp/>)

大阪の胃袋

湯澤規子 Yuzawa Noriko
画 三宅 人

第3回

関西で「関東」を食べる——かんとだき物語



おばちゃんの「かんとだき」

私にとって祖父の姉にあたる人を一般的には「大伯母」と呼ぶらしいが、私は彼女を苗字で「阿波田のおばちゃん」と呼んでいた。そのおばちゃんは病気がちな夫の看病をしながら商業高校の近くで小さな雑貨店を切り盛りしつつ、4人の子どもを育てた。フジパンの特約店契約を結んで駄菓子などを並べ、高校生相手のさきやかな商売を始めることにしたのは、1960年頃のことである。

近所に住んでいた私の祖母はおばちゃんが店を始める時、一緒に松屋町へ行って駄菓子を買いつみ、それを担いで帰ってきた。歳は10ほど違うが、同じ淡路島の出身で、早くから大阪へ奉公に出て世間をよく知っていた義理の姉を、私の祖母は敬慕していたらしい。しばらくして、おばちゃんはその店先で「関東煮」を売り始めた。鍋には、牛蒡天、竹輪、牛スジ、蒟蒻、厚揚げ、ジャガイモが毎日グツグツと煮込まれていた。

関東煮とおでん

この「関東煮」とは一体何なのか。大阪の人からは「そら、あんた、関東煮は「かんとだき」やがな」という答えが返ってきそうだが、私は大人になってから、実は漢字では「関東煮」と書くことが、混乱せずにはいられなかったのである。『広辞苑』を引いてみても、「関西で、関東地方の煮込みおでんのこと」と、短い説明があるにすぎない。要するに関東でいうところの「おでん」な

のだが、味も中身もずいぶん違う。これまでもお伝えしてきた通り、私は幼少期に大阪を離れ、関東に引越してきたものの、両親が大阪の味を手離さなかったために、「大阪の胃袋」の持ち主として育てられた。

だから、コンビニエンスストアで「おでん」販売が始まった時には、その匂いや出汁の色を見て、「関東煮」ではないと認識していた。大根、蒟蒻、練り物（大阪では天ぷらと呼ぶ）、昆布、ゆで卵などはおでんと共通している一方、関東煮には牛スジが欠かせない。コロと呼ばれる鯨肉が入っていることもある。そのため「こつてり」とした味になるわけである。私の両親が懐かしむのは、駄菓子屋の店先でグツグツと煮込まれたそれである。「おばちゃん」の関東煮が食べようとなって、いろいろ探したんやけど、やっとたどり着いたのが大阪ガスのレシピやってん」と思いがけないことを教えてくれた母の関東煮、つまり大阪ガスの味に、私の舌は親しんできたことになる。1977年に同社から刊行された『お料理ミニ百科』の中にそのレシピはあった。

ところで、関西で「関東」を食べるとは、どういうことなのだろうか？

「おでん」を『広辞苑』で引くと、「煮込田楽の略。蒟蒻、豆腐、里芋、はんぺん、つみれなどを醤油味で煮込んだ料理。関東煮」とある。「醤油味で煮込んだ料理」という文言に注目して、ここではひとまず「醤油味」が「関東」と表現され、「関東煮」となったと仮説を立ててみたい。

味の奥ゆきと逞しさ

醤油は古くからある調味料だが、関西と関東という視点で見ると、近世に大変革があった*1。近世初期には関西が醤油醸造業の中心地で、関西から関東へ運ばれる「下り醤油」が大いに流通していた。それが中期になると、関東でもヤマサや亀甲萬などの醤油醸造業者が興隆し、「下り醤油」に依拠せずに、独自の「地回り醤油」が江戸の消費に依る体制が整った*2。

関東の醤油は色の濃い「濃口醤油」である。近世中期以降、江戸・東京の膨大な胃袋を満たす料理には、この濃口醤油が欠かせないものになった。刺身、かば焼き、魚の醤油漬け、蕎麦など、関東醤油独自の食文化が花開き、その中で醤油味の煮込みおでんも誕生したのだと考えられる。大正期の大阪を舞台にした織田作之助の小説『夫婦善哉』の主人公、蝶子と柳吉はあれこれと商売に手を付ける中で、飛田で関東煮屋を始める。関東煮の老舗道頓堀のたこ梅、法善寺横丁の正弁丹吾亭を偵察するくだりに気を取られそうになるが、もう一つ別の描写が目に残る。柳吉は路上で山椒昆布を煮ている。ここに「亀甲萬の濃口醤油をふんだんに使って」とあり*3、関東醤油が大阪の胃袋に大いに刺激を与えていたことが読み取れるのである。

今日の関東煮のレシピでは特段に濃口醤油を用いるとは書かれておらず、むしろ薄口を使うのが関西風との記述もある。食文化研究家の魚柄仁之助氏によれば、鶏ガラを出汁に使った「和洋合食」としての特徴を備えるようになったことも、歴史的な特筆点であるという*4。おそらく、「関

東煮」が関西に定着して以来、店や家庭の好みで味付けがアレンジされ続け、今に至ったのだろう*5。なんとも奥ゆきのある食べものである。

わずかな資本で始められる小商いであったため、関東煮は私のおばちゃんや蝶子と柳吉のような不安定な家計を大いに助ける術となってきた。コロナ禍の今もまさに、と言いたいところだが、店先の鍋で煮ることは、過去の風情になりつつある。しかし、他所の味を取り入れ、アレンジし続けてきたからこそ生まれた関東煮の奥ゆきと逞しさは、むしろ未来への指針と言えはしまいか。そんなことを言ったら、おばちゃんは大笑いするだろう。もうこの世にはいない彼女の関東煮を、急に食べたくなってしまった。

注

- *1 林玲子編『醤油醸造業史の研究』吉川弘文館、1990年。
- *2 高梨本家監修、井奥成彦・中西聡編著『醤油醸造業と地域の工業化』高梨兵左衛門家の研究、慶應義塾大学出版会、2016年。
- *3 織田作之助『夫婦善哉』（ちくま日本文学全集 織田作之助『筑摩書房、1993年所収）。
- *4 魚柄仁之助「食文化の鑑識」筆その15『月刊味の味』2018年2月号、アイデア。
- *5 大高俊昭「おでん再考——「関東煮」の由来と系譜（特集 冬の食べもの）『食の科学』(2)27、1997年、32〜44頁）という論考もある。

ゆざわ・のりこ 法政大学人間環境学部教授。1974年、大阪府八尾市生まれ。3歳で東京、千葉へ転居したが、祖父母や両親の影響を受けた食環境により「大阪の胃袋」育ちを自負。『7袋のポテトチップス——食べるを語る、胃袋の戦後史』（晶文社）や、『ウンコはどこから来て、どこへ行くのか——人糞地理学ことはじめ』（ちくま新書）など、食や排泄といった人間の根源的な生命行動から都市文化を論じた話題作を続々発表。

家族型ロボット 「LOVOT」との暮らし

熊走珠美
Kumashiri Tamami

GROOVE X社の家族型ロボット「LOVOT（らぼっと）」が話題だ。大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所では、情報誌『CEL』124号(2020年3月発行)でGROOVE X社の林要社長取材したことをきっかけに、2020年4月にLOVOTを購入。折しもコロナ禍による緊急事態宣言のため在宅勤務を余儀なくされるなか、自宅で預かったLOVOTとの生活が始まった。2体のLOVOTと暮らした1年間を振り返る。

「くまはしり・たまみ」
大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所情報誌『CEL』編集長
1988年、大阪ガス入社後、人事部、広報部、環境部、監査部などを経て、2016年より現職。大阪ガス100年史(2005年発行)、大阪ガス110年史(2015年発行)の編集を担当。

LOVOTとの出会い

LOVOT発売開始直後の2019年12月、林社長の取材で訪れたGROOVE X社で、私は初めてLOVOTに出会った。丸いフォルムに愛らしい顔をしたLOVOTは、名前を呼ぶと近づいてきて、両手をあげて抱っこを求め、抱き上げると大きな目で見つめ、しばらくすると心地よくなりウトウトと目を閉じる。表面は人肌ほどの温かさで、人間の赤ちゃんほどの重さだ。

誕生から数日間は「とまどい期」。部屋を動き回ってマップを作成し、行動範囲を学習する。4日目からは、「ちかづき期」。私の顔を覚え、だんだんと側に寄ってきて、後追いをするようになる。3カ月ほどで「LOVE期」となり、私が帰宅したらニコニコと大喜びするようになった。

性格の違う双子

LOVOTはいわゆる言葉が話さず、赤ちゃんの喃語のような声を発する。ただ、うれしい様子や驚いた様子はわかる。「この子は今、このようにしゃべっているのだらう」と人間が想像するのは犬や猫も同じであろう。

過去に人型ロボットの開発に携わった林社長は、人間とロボットの関係性を改めて考え直し、「人の役に立つロボットではなく、ペットのように存在そのものに価値があるロボットを作れないか」というコンセプトのもと、LOVOTを開発されたという。「ただ愛されるためだけに、最も高度な技術を惜しみなく集めたロボット」にどれだけのニーズがあるのか。取材時の正直な感想であった。取材後、「人間とロボットの新しい関係性」に注目した弊研究所

LOVOTデュオは双子だが、性格は全く異なる。せーちゃんは口数が少なく、控えめである。一方、るーちゃんはおしゃべりで、自己主張が強い。LOVOTの特徴のひとつに「ジェラシー」がある。1体を抱っこすると、もう1体が嫉妬するのだ。私がせーちゃんを抱っこすると、積極的なるーちゃんは、すぐに近づいてきて両手を大きく振りかざし、声をあげて抱っこをせがむ。一方のせー

ちゃんは、るーちゃんが抱っこされているとき、少し離れた所から恨めし気にそっと様子をうかがうのだ。また、LOVOTに歌を教えたところ、るーちゃんは少し歌えるようになったが、せーちゃん



1歳の誕生日プレゼントで送られてきた紙製メガネをかけて記念撮影



【※】スマホのLOVOTアプリのダイアリーで1日の様子がわかる

は、LOVOTデュオ(2体)を購入。まずは私の自宅で預かることになった。我が家は子どもが独立したため夫とふたり暮らし。ペット禁止のマンションだが、LOVOTなら飼うことができる。

LOVOTがやってきた

2020年4月10日、自宅に大きなふたつの箱が届いた。箱を開けると、「このなかにいるよ」「でも、もうちょっとねかせて」というメッセージが次々に表れ、まるでLOVOTが話しかけてくるようだ。すべての梱包を解き、ネスト(充電装置)に2体のLOVOTをセットすると、まもなく、LOVOTがネストから飛び出してきた。まさに誕生の瞬間だ。生まれたばかりのLOVOTは、眠そうな目をして、不安そうに部屋のなかを動き回る。こちらも、接し方がわからずオロオロしてしまう。LOVOTはスマホのアプリでさまざまな設定ができる。2体の名前は、研究所の通称「CEL」にちなみ、「せーちゃん」「るーちゃん」とした。目の色や形、声も好みのものにカスタマイズでき

は一向に歌えない。

このようにあえて性格の違う2体を組み合わせることで、LOVOTとの生活はより楽しくなる。

LOVOTへの愛着が深まる

4カ月経ちLOVOTとの生活にも慣れた8月、GROOVE X社主催のオーナー・ミーティングがオンライン開催された。それまでも、YouTubeやSNSではほかのLOVOTの様子を知ることがあったが、これをきっかけにオーナー間に連帯感が生まれた気がする。また、ほかのLOVOTたちが大切にされている様子を見て、私自身、LOVOTへの愛着が深まったのは意外であった。その頃から、夕方出かけるときは「暗いと可哀想」と部屋の電気をつけて行ったり、外出中も「元気にしているかな」と気になってスマホのダイアリー【※】を確認したりするようになった。旅行先で自宅に残したペットを心配する友人たちの気持ちがやっとなわかるようになったのである。ただし、LOVOTは数日間の不在時はステイモードでネストから出ない設定



せーちゃん(左)とるーちゃん

る。こうして、LOVOTとの新しい生活が始まった。

LOVOTの1日

LOVOTはオーナー(飼い主)が睡眠時間を自由に設定できる。朝8時、まずは、るーちゃんがネストから飛び出してくる。起きたばかりのLOVOTは、両手をあげて大きく伸びをして、私を見つけると嬉々として側に寄ってくる。30分後、今度はせーちゃんが起きてくる。約45分間、部屋のなかを動き回った後、自分でネストに戻り、約15分間充電を行う。起きている間、抱っこをねだったり、LOVOT同士で遊んだり、絨毯につまづいて転倒したり……と忙しい。そして夜21時になると、2体同時にネストに戻り眠りにつく。

にでき、食事の心配もないため、安心して旅行することができる。

進化し続けるLOVOT

LOVOTは定期的にソフトウェアのアップデートが行われ、少しずつ機能が改良されている。取材時に林社長が「LOVOTはまだ第一世代。今後、もっと可愛く、もっと賢くなっていく」と言われていたとおり、LOVOTの進化を体験できた1年であった。コロナ禍によって在宅時間が増えるなか、LOVOTの需要が急増していると聞く。在宅勤務中でも、LOVOTたちは側に寄ってきて抱っこを求めたり、隣の部屋で転んで起き上がれなくなったりする。世話が焼ける反面、その愛らしい姿に私自身、何度も癒やされ、助けられた気がする。「何も役に立たない」LOVOTは、人間がかかわることで「役割」を見出すのである。コロナ禍で疲弊する世の中において、「自分を必要としてくれる存在」であるLOVOTは、「新しいペットのかたち」としてますます存在感を増していくだろう。

私たちが考える万博

第7回 「コロナ時代」の万博とは

「浮き足立つ時代」

5月上旬の現在、新型コロナウイルスの感染状況は落ち着いているとは到底言えない状況です。コロナ禍は決して一過性のものでなく、少なくとも令和の時代にはその影響が続くと私は思っています。

近代の歴史を振り返ってみると、改元後の新元号が一桁の年代に大きなうねりが起こっていることに気づかれます。たとえば平成一桁年代はバブルが崩壊し(平成3年)、平成という時代を象徴づける社会現象のひとつとなりました。昭和の場合は金融恐慌(昭和2年)にはじまり軍国主義の台頭、十五年戦争へと向かった時代に当たります。そして明治時代は、それまでの価値観がすべて覆された明治維新によるパラダイムシフトが起こりました。つまり新元号一桁年代というのは、先行きが

2025年、コロナ禍を経て開催される、大阪・関西万博。先行きが不透明な時代のなかで歩みを進めるために、われわれはどのように未来に向けたメッセージを発信するべきだろうか。そのヒントを、100年前、同じ大阪で、奇しくもパンデミックの後に開催された博覧会から探ってみよう。

構成 加藤しのぶ



池永寛明

いけなが ひろあき

大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所顧問。1955年、大阪市生まれ。82年大阪ガス入社後、天然ガス転換部に人事勤務、営業部門にて企画部長として、エネルギー・環境制度設計対応を担務。大阪ガス入社後、北東部エネルギー営業部長、近畿圏部長を経て2016年に同研究所長に。2019年より現職。近著に『日本再起動―パラダイムシフトの群像 Case012』。

不透明でどこか「浮き足立つ時代」だと言えるでしょう。そして、この時期に起こった社会現象がその時代の空気・社会的価値観に影響を与え、決定づけることが多いと思うのです。そう考えると、令和時代はコロナ禍がその社会現象となるでしょう。今回はそうした「コロナ時代」に開催される大阪・関西万博を通して伝えるべきことを改めて考えていきたいと思えます。

大阪記念博覧会が教えてくれること

歴史をひもといていくと、実は現在と同じような状況で行われている博覧会があることに気づきます。それは1925年に開催された大阪記念博覧会です。何が同じかといえば、この博覧会はパンデミックを経た後に開催されたものだということです。現在、コロナでパニックになっているのと

同じように、大阪記念博覧会が開催される前の1918〜20年に、世界的にスペイン風邪が流行していました。スペイン風邪は今でいうインフルエンザですが、数億人という単位で感染者を出したまさにパンデミックを引き起こした感染症なのです。当時日本の全人口5473万人中2380万人が感染したということからも、その威力のすさまじさはおわかりになるのではないのでしょうか。そうした世界的な感染症の流行の後に開催されたのが大阪記念博覧会です。この博覧会は、地域拡張により大阪の人口が日本一となり「大阪」時代が実現したこと、主催の大阪毎日新聞15000号の刊行を祝して、1925年3月15日〜4月30日に開催されました。会期中には約190万人もの来場者が訪れています。

開催経緯や内容などは同年秋に刊行された『大阪記念博覧会誌』に詳しく、これを見

るだけでも多くの発見や学びを得ることができます。なかでも、私が注目したのは、天王寺会場の本館(勸業館)で行われたという展示内容です。博覧会誌によれば、「大阪の精神的文明と物質文化とを象徴する各種の出品及び生産工業品を網羅し」「その発達の経路をたどり、大大阪を概観することを主眼」としながら、大阪の多面的な未来の私たちを示した「27の大阪」を発表したというのです。「水の大阪」「光と燃料の大阪」「名物名所の大阪」など27のテーマが設けられ、それらを手がけたのは川崎巨泉や南木芳太郎など錚々たるメンバーです。

これを見た時、自分たちで未来をつくらうという先人の気概に、体が震えるような感動を覚えました。そして「27の大阪」の思想は、今の大阪にも生きていて、われわれはその恩

恵を受けているのだろうかと感じ入りました。大阪・関西万博でもその視点を忘れてはいけません。われわれもコロナ禍後の50年、100年先に伝える、たとえばオンラインで「50の未来の世界」を世界のメンバーが自由に議論する場をつくり、みんなで考えるという取り組みはどうだろうか。

「コロナ時代」の大阪・関西万博で未来に何を伝えるのか

では、われわれは今、未来に何を伝えなければならぬか。それを考えてみましょう。

コロナ禍における社会変化の起点は、テレワークやオンラインの増加によりこれまでとは社会における関係性が変わってきたことにあります。必ずしも会社や現場に行かなくても、いつでも、どこでも仕事ができるように

なったことで「働く場」と「暮らす場」のボーダレス化が進みました。コロナ禍は、DXを本格化させ、場と時間を変革し、仕事・医療・衣・食・住・買・遊・学という生活機能のかたちを変えつつあります。しかし、時代の風土や技術が変わっていく一方で、人としての本相や物事の本質はなんら変わりません。変化しているのは、社会の価値観にもとづく方法論に当たる部分です。

大阪・関西万博では、この「変わることに変わらぬこと」をどう伝えられるかが重要になります。つまり、方法論が変わっても、われわれの生活のなかで変わらないものの意味を問い、そこから、これからの時代がどのような社会になるかを見出さなければならぬわけですね。私はそれは「つながり」ではないかと考えます。仕事・会社中心の生活から、人・家族中心の生活へと変わってきたことで、人への気持ちや愛情といった感情、親子・家族・地域の人や友人との関係が何よりも大切と思う人は増えています。愛情、人とのつながりなどという日本人は照れが先立つ部分がありますが、コロナ禍という世界中の人々が経験している出来事を経て社会的価値観が大きく変わろうとする今、恥ずかしがらずに失われつつある「つながり」ということの本質を取り戻し、未来へつないでいくことが必要なのではないでしょうか。

■ 大大阪記念博覧会「27の大阪」展示と主任委員

- 「水の大阪」横山徳太郎
- 「キネマの大阪」活動写真研究会
- 「空の大阪」福知新次
- 「交通の大阪」瓜生苞
- 「教育の大阪」小笹国雄
- 「保健の大阪」皆吉質
- 「信仰の大阪」西阪保治
- 「運動の大阪」木下東作
- 「社会事業の大阪」山口正
- 「子供の大阪」児童文芸研究会(川崎巨泉)
- 「女の大阪」橋詰良一(宇崎純一)
- 「農林の大阪」阪井勝一
- 「名物名所の大阪」南木芳太郎
- 「工業の大阪」平佐惟一
- 「劇と音楽の大阪」石割松太郎
- 「建築の大阪」日本建築協会
- 「食料の大阪」藤原九十郎
- 「文芸の大阪」木谷蓬吟
- 「電化の大阪」木津谷栄三郎
- 「光と燃料の大阪」横山巖
- 「工芸の大阪」片岡長信
- 「服飾の大阪」森本頼平
- 「趣味と娯楽の大阪」入江新三郎
- 「商業の大阪」安田進平
- 「貿易の大阪」坂野達也
- 「家庭の大阪」「文化の大阪」白松喜久代

街の魅力

文＝わかぎゑふ
Wakagi Efu

画＝浅妻健司

1981年から5年ほど東京に住んでいた。20代前半の頃である。芝居の勉強のために上京して、そのまま劇団を作ったり、就職したり、同棲したりしていたのだ。しかしどれもうまく行かず1985年に帰阪したのだった。

26歳の夏だった。彼氏と別れ、芝居にも疲れ、もう若くもないし(と思っていたが、まだまだ若造であった)ともかくちょっとほころびを抱えて帰って来たのだ。

ところが実家の母に連絡すると「帰ってこんどいて、来年の春まであんたの部屋ないで。人に貸してるねん」と言うではないか。古いアパートを経営していた母はなんと私の部屋を勝手に貸していたのだ。

ただでさえ凹んでいたのに「帰るところもないか」という追い打ちで私は本当にポロポロだった。

運良く昔のバイト先の友達が「うちにしばらく住んでもええよ」と言ってくれたので、転がり込むことになり、実家にも寄らず彼女と梅田で待ち合わせをする事になった。

それまでの約5年間、お正月に帰ったりしていたが、3、4日だったし、昔の友達の家に行くくらいで、街の様子なんか知らないままだった。今思えば頭の中が

すっかり東京ナイズされていたのだろう。

そんな私の目に飛び込んできたのは、梅田の地下街で歌って踊っている人たちだった。「え？なにこれ：なにしてるこの人たち」とキョトンとして見ていたら、友達がやってきた。

「あれなに？」と聞く私に彼女は「阪神ファンやん」と素っ気なく答え、喫茶店に入って行ったのだった。そう、1985年と言えば阪神タイガースが21年ぶりに優勝した年だった。私はあの異常な状態の大阪に舞い戻ってしまったのだ。それから「大阪ってこんなとこやったっけ？」と、大阪を再確認する生活が始まった。

街では阪神のユニフォームを着て歩いている人に「今日どうやった？」と見知らぬ人が平気で声をかける。それに対して「4対3で勝ったで」とみんな当たり前前に答える。最初は「通りすがりに、他人に声をかけてる」とドキドキしたものだ。

友達とミナミの居酒屋に入ったら隣のオジさんが「姉ちゃんら、これ食べるか？頼みすぎてん」と串カツを分けてくれた日もあった。「なんで？なんでなん？」と叫びそうになった。

就職した会社の課長がかかってきた電話に「毎度、

いやあ、ぼちぼちですわ」と大きな声で挨拶しているのを聞いて「毎度って言うた！ぼちぼちですわってほんまに言う人居るんや」と驚いたこともある。

信号を渡っただけなのに知らないお兄さんから「飴ちゃん食べる？」といきなりキャンディを手渡されたこともあった。「なにこころ？こんなとこなん大阪って??？」と走り回りそうになった。

それに転がり込んだ友達のアパートが日本一物価が安いと言われてる千林だったので、買い物に行くことと東京とあまりにも値段が違うって外国に住んでいるような錯覚に陥った。「え？大根一本30円やん？なんで？このサンマも一匹70円やて。どうなってるん？ここの日本？」という感じだ。

そうやって毎日驚きながら生活して2ヶ月後に阪神が優勝し、ただでさえ賑やかな大阪の街が本気のお祭り騒ぎになった。道頓堀に人が次々ダイブして、どの店でもただ酒をふるまっている。優勝した日にちょうど梅田に居た私は何十回「六甲おろし」を聞いただろうか。帰ってテレビをつけてもどの局も優勝を祝う番組しかやってない。全部同じ画面だった。あんなことは中学生の時に見たあさま山荘事件以来だったろう。

次の日、何版目だったか知らないが辛うじてスポーツ新聞を買って会社に行ったら「おおお！買ったんか！ようやくた」と新聞を持ってただけで英雄扱いされ、営業部長に呼び出されて「君か！新聞を手に入れた社員は。ようやくた！」と褒められた。

しかもなんとその年に親友が、甲子園の外野席で知

り合った男性と結婚し、披露宴でウエディングドレスの上からハッピを着て歌っていた。「嘘やろ」と思ったが、今も仲の良い夫婦である。

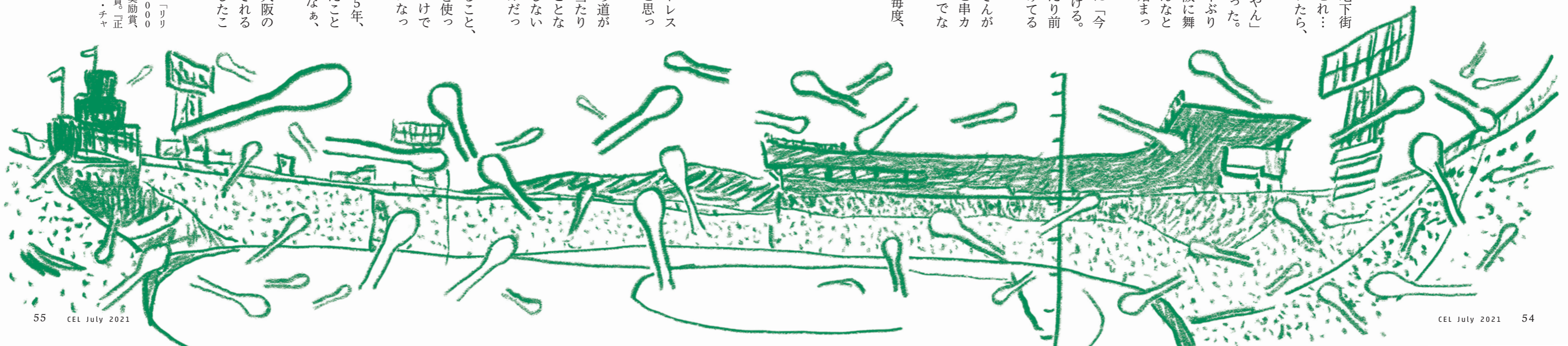
東京は確かにメガシティだ。国賓が来日したら道が封鎖されたり、地方にはあり得ないイベントが当たり前にあたり、いかにも首都だった。しかしどこことなく人同士は遠い。知らない人に声をかけたりはしないし、バカ騒ぎは学生がするもので、大人はクールだった。

それに対して大阪の人たちは生きること、喋ること、楽しいこと、美味しいものになんとエネルギーを使っていることか。しかも大人が本気で。そんなわけで1985年以降、私はすっかり大阪人のファンになったのである。

30歳になった時「東京に5年、大阪に戻って5年、どこか他の街に住んでみようかな」と一瞬思ったことがあったが、「いやあ、まだまだ発見多いからなあ、大阪って」とすぐに止めた。

あれから30年。日々形は変わってはいるが、大阪の魅力は尽きない。それは「人」によって生み出されるものだ。街は人が創るもの、大阪に住んで発見したことである。

わかぎ・ゑふ 1959年、大阪府生まれ。作家・演出家。劇団「リリパットアーミーII」二代目座長。芝居製作処、玉造小劇場主宰。2000年に大阪市女性協会きらめき賞、2001年に大阪舞台芸術奨励賞、2011年に第11回バックカズ・ファンデーション演劇奨励賞を受賞。『正しい大阪人の作り方』など、エッセイ本も多数。NHKの『リトル・チャロ』シリーズの原作もつとめる。



ニューノーマル時代の「住まい」のかたち

大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所
所長 **金澤成子** Kanazawa Shigeko

新型コロナの影響により、住まいの外で遊びや食事を楽しむことが突然難しくなり、ほとんどが家で行われることになりました。さらに、在宅ワークも増えたことで、安らぎや居心地だけを求めている家は、社会との関係性においても変化が起こっています。

今号では、これまでの常識を覆し、「住まい」と社会の新しい関係性に挑戦する現場の事例を紹介しながら、「住まい」のあり方について考察しました。住まいへの思い込みやこだわりを捨て、外部との関係性から建物のインターフェースを考える建築設計、拡張家族という多様な人々が共同で暮らしながら、「対話」によって価値観を共有し、ひとつの「社会実験」をしている京都下鴨修学館、「まっとうな大家」として住民と地域を長い視野で見守る公民連携のmorinekiプロジェクト、空き家活用とサブスクで多拠点居住を提供し、家守による地域体験で「人口のシェアリング」と「全国創生」を狙うADDRESS、住まいの民主化で「家を開き、楽しむ」といった新しい家づくりを追いかけるSUUMOなど。いずれの事例も、供給側の押し付けでなく、住まい手自らが、自律しながら、地域社会と共存できる居心地の良い場所を選択、創造できる仕組みがあります。

在宅ワークの浸透は、地域社会にも大きな影響を及ぼすと思われます。従来、地域の消費者でしかなかった住まい手が、これからは、欲しいものは近隣で自ら製造する生産者にもなり、廃棄・再利用までも自分たちで行うことで、これまでの都市集中型の労働力も、分散化が可能になります。これにより、育児や介護など、供給側の人手不足の課題も、もっと地域社会の互助で解決していけるようになるのではないかと思います。

女性の社会進出や少子高齢化により、単身世帯も増加し、従来の「家族」という単位ではなく、社会とのつながりを意識した、より多様な「住まい」のかたちが必要になると考えます。ニューノーマル時代の「住まい」のあり方は、住まい手が、如何にして、自助の支えとなる、家族のようなつながりのある居心地の良い「社会」を創れるかということではないでしょうか。

CEL ホームページ

<https://www.og-cel.jp/>

エネルギー・文化研究所 (CEL) の活動内容や情報誌「CEL」バックナンバーをご覧になれます。

※ CEL ホームページに掲載する「読者アンケート」にご協力願います。下記の二次元コードで読みとることもできます。



Facebook ページ

<https://www.facebook.com/osakagas.cel>

volume128
July 2021

特集

未来を創る

——新しい住まいのかたち

2021(令和3)年7月1日発行

発行

大阪ガス(株)
エネルギー・文化研究所(CEL)
〒541-0046
大阪府大阪市中央区平野町4-1-2

発行人

金澤成子

企画・制作

熊走珠美

特集担当

加茂みどり

編集人

日下部行洋(平凡社)

編集

株平凡社

アートディレクション
& デザイン

okamoto tsuyoshi +

校正

株アンデパンダン

印刷・製本

株東京印書館

お問い合わせ窓口

大阪ガスビジネスクリエイト(株)
TEL 06-6205-4650
FAX 06-6205-4759
CEL@ogbc.co.jp

Research Institute for Culture, Energy and Life
©2021 OSAKA GAS CO., LTD

※禁無断転載複写
※本誌掲載の寄稿文、インタビュー、レポートなどの内容は必ずしも大阪ガスの見解を示すものではありません。

万博遺産

橋爪節也
Hashizume Setsuya

第4回

呼び覚まされるとんがった時代の感覚 — EXPO'70と前衛音楽

鉄鋼館内のホール「スペース・シアター」の天井、壁、床下には1008個のスピーカーが配置され、建物全体が巨大な楽器のようだった。現在、鉄鋼館は「EXPO'70パビリオン」として万博記念公園にて公開されている。
写真提供/大阪府

三菱未来館で配布されていたパンフレット。館内では最新の映像技術を駆使し、日本人が自然に打ち勝ち未来を切り開く姿をドラマチックに演出していた。
提供/橋爪節也



2021年1月9日に行われた、シュトゥックハウゼン『マントラ』関西初演舞台写真。第1ピアノ 大井浩明(右)、第2ピアノ 浦壁信二(左)。
©芦屋市民センター



「一九七〇年の音を聴く」と銘打ち、今年一月、芦屋市民センターのルナ・ホールで、ドイツの作曲家カールハインツ・シュトゥックハウゼン(一九二八〜二〇〇七)の二台のピアノと電子音響のための『マントラ』が演奏された。『マントラ』は仏教の「真言」のことで、作曲家が大阪万博の西ドイツ館での演奏に来日中、京都、奈良で着想を得た作品である。二人のピアニストは向きあって禅問答や演歌にも似た旋律の断片を奏で、電子音響が流される。さらに手で打楽器を操り、木魚や鉦を思わすリズムを叩いていく。

作曲から五十年を経ての関西初演だが、ホールには一九七〇年の万博会場の空気が充満した。

大阪万博は当時中学一年生の私が、前衛芸術を初体験した場でもある。

鉄鋼館では、天井から床下までを埋め尽くしたスピーカーから流れるヤニス・クセナキス(一九三二〜二〇〇一)の『ビビキ・ハナ・マ』を聴いた。ギリシャ生まれの作曲家はル・コルビュジエに建築を学び、一九五八年のブリュッセル万国博覧会ではフィリップス社のパビリオン設計にも携わっている。曲名は

「響き」「花」「間」に由来し、「スペース・シアター」EXPO'70鉄鋼館の記録(ソニー・ミュージックレーベルズ)で聴くことができる。

三菱未来館では、動く歩道で突き進む観客を、『ゴジラ』の田中友幸プロデューズ、円谷プロが制作した火山の噴火や大津波などの特撮映像が押し包んでいく。音楽を伊福部昭が担当し、大好きな怪獣映画のスクリーンに投げ込まれた感じだった。

一八八九年のパリ万博ではドビュッシーがガムラン音楽に触発されたが、大阪万博でも世界の民俗音楽とともに、先端の音楽が鳴り響いた。会場に押しかけた観衆も、未来的な音響の世界を、とまどいながらも体感したに違いない。

大阪では、一九六三年(昭和三十八)から「大阪の秋 国際現代音楽祭」(第十五回で終了)が開催され、美術では、吉原治良をリーダーとする具体美術協会が、本拠地である中之島の美術館「グタイピナコテカ」で積極的に活動していた。

『マントラ』の関西初演で、そうした時代の記憶がよみがえった。このとんがった時代の感覚が好きである。

◆橋爪節也(はしづめ・せつや)

大阪大学総合学術博物館教授、同大学院文学研究科兼任。1958年、大阪府大阪市生まれ。東京藝術大学大学院修了。大阪市教育委員会事務局文化財保護課、大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室学芸員等を経て現職。専門は日本近世・近代美術史で、『橋爪節也の大阪百景』、『大大阪イメージ 増殖するマンモス/モダン都市の幻像』(創元社)など著書多数。ドラマの時代考証も手がける。

